無縁社会

―いじめ・子ども虐待・希望を考える―

こども教育宝仙大学　基礎ゼミ３（２０１２）

はじめに

私たち基礎ゼミ３（高津ゼミ）では、春・夏の両学期をとおして「いじめ・子ども虐待・希望」について研究を重ねてきました。テーマが定まったのは６月のはじめの頃。自分たちで何を調べたいか話し合い、意見を交えながら、３つのテーマに絞り込んでいったのです。

テーマ設定後、３つのグループに分かれて調査を開始し、さらに、夏休み前には１年生全体を対象にしてアンケートを取るなど、活動の幅を広げました。

調査項目は、「いじめ」はどこに向かっていくのか、どのような人間関係から「いじめ」が起こるのか、家族の絆は強まっているのか、心の支えになっている人はいるのか、今の生活に対する満足度はどうか、小学生の頃の夢はなんだったのか、なぜ保育・幼児教育の道に進もうと考えるようになったのか、大学卒業後の進路は何か、などなど。質問は多岐にわたりましたが、みんな不平を言わず、協力してくれました。この場を借りて、学友の協力に感謝の意を表します。有難うございました。

秋学期のはじめには、夏休み中に各グループで集計した結果を持ち寄り、全体で集約しました。それをもとにグループごとに話し合い、他の社会調査と比較しながら、いじめ・子ども虐待・希望について理解を深めていったのです。

10月末の宝仙祭（学園祭）は、ゼミの活動を発展させるうえで重要な機会になりました。グループごとに調査結果を模造紙にまとめ、ブースに展示し、学友や先生、見学に来た高校生や保護者の方々にお見せすることができました。みんなで協力して準備できたことは、ゼミの結びつきを深めるうえで非常によかったと思います。展示は、自分たちがこれまでやってきたことの意義を再確認し、自信を深めるうえで、大切な機会だったと思います。

学園祭の後には、研究結果をより良いものにするためにパワーポイントを用いてグループごとに発表しました。ここでは、いじめはなぜ起こり、その原因はどこにあるのか。どうすればいじめは減らせるのか、無くすことができるのか。虐待は何が原因で起こるのか。種類は、対策は。子どもたちはどのような職業に就きたいのか。私たちの希望は、そして未来は、といった内容を、グラフや事例などを用いてりわかりやすく説明することができました。

このようなゼミの経験というのは、私たちにとって、いままで身近にあるようで気づかなかった、また、気づいていても見ないようなふりをしていた出来事に対して、正面から向かい合う良い機会になったと思います。そして、そのことを深く調べることによって、それぞれに疑問がわき、一つ一つそれを解くことができたのではないかと感じています。

そのような経験をもとに最後にまとめたのが、この研究報告です。是非読んで下さい。

2013 年 1 月

熊谷　隼

目次

はじめに ・・・・・・・・ 1
第Ⅰ章　いじめ問題――真相にせまり、解決策を探る
　第１節　「いじめ」の実態―――アンケート結果の分析を中心に ・・・・・・・・ 3
　　１．だれが、いつ、どのような「いじめ」をするのか
　　２．変化する「いじめ」と最近の特徴
　第２節　事例に学ぶ――大津市中学生いじめ自殺事件 ・・・・・・・・・ 7
　　１．深刻な「いじめ」、ずさんな対応
　　２．隠ぺい・謝罪・再調査
　第３節　「いじめ」はなくせるか ・・・・・・・・・ 9
　　１．「いじめ」とは何か――定義の変化とその背景
　　２．なぜ、「いじめ」はいけないのか
　　３．「いじめ」問題の解決にむけて
第Ⅱ章　子ども虐待のない未来をめざして
　第１節　新聞記事に見る子ども虐待事件 ・・・・・・・・ 18
　第２節　子ども虐待の実態を探る ・・・・・・・・ 20
　　１．増加する子ども虐待
　　２．だれが、どのように、子どもを虐待するのか
　第３節　子ども虐待はなぜ起こるのか ・・・・・・・・ 22
　　１．虐待する親、虐待を受ける子ども
　　２．虐待は親から子へ連鎖するか
　第４節　子ども虐待のない未来にむかって ・・・・・・・ 25
　　１．子ども虐待はなぜいけないのか
　　２．子ども大切にする家庭・社会・地域をめざして
第Ⅲ章　私たちの希望、子どもたちの未来
　第１節　子どもたちが将来なりたい職業 ・・・・・・・・ 30
　　１．希望する職業ランキング
　　２．職業選択に影響を与えた人物・理由
　第２節　逆境に育つ子どもたち――保育士をめざして―― ・・・・・・・・ 33
　　１．養護施設からの巣立ち
　　２．非行からの脱出と未来への旅立ち
　第３節　私たちの希望――未来にむかって―― ・・・・・・・・ 37
　　１．幸せ度・満足度チェック
　　２．未来にむかって――保育士・幼児教育者へのみち
参考文献・資料一覧／アンケート調査結果 ・・・・・・・・・ 47
あとがき ・・・・・・・・・ 64

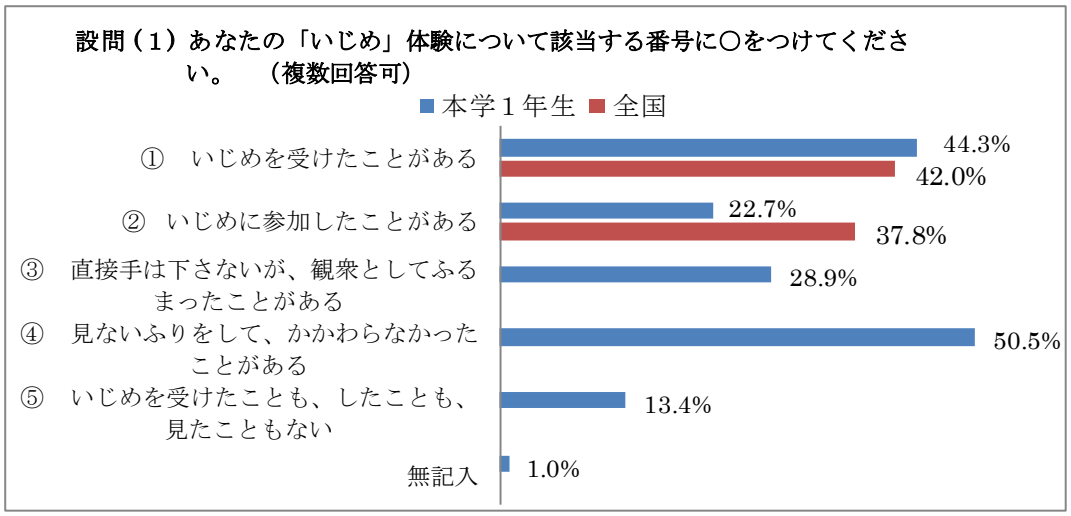
第Ⅰ章　「いじめ」問題
――真相にせまり、解決策を探る――

第１節　「いじめ」の実態――アンケート結果の分析を中心に

子ども教育宝仙大学の１年生を対象に高津ゼミが行なったアンケートをもとに、本学生のいじめ体験にいて考察してみよう。その際、メディア・リサーチバンクが 2006 年 10 月に行った「いじめ問題」に関する調査をはじめ、他の調査結果との比較も試みることにしたい。ちなみに、メディア・リサーチバンクのいじめ調査の対象者は、全国の 12～14 歳の男女で、有効回答は 757 件であった。

１．だれが、いつ、どのような「いじめ」をするのか

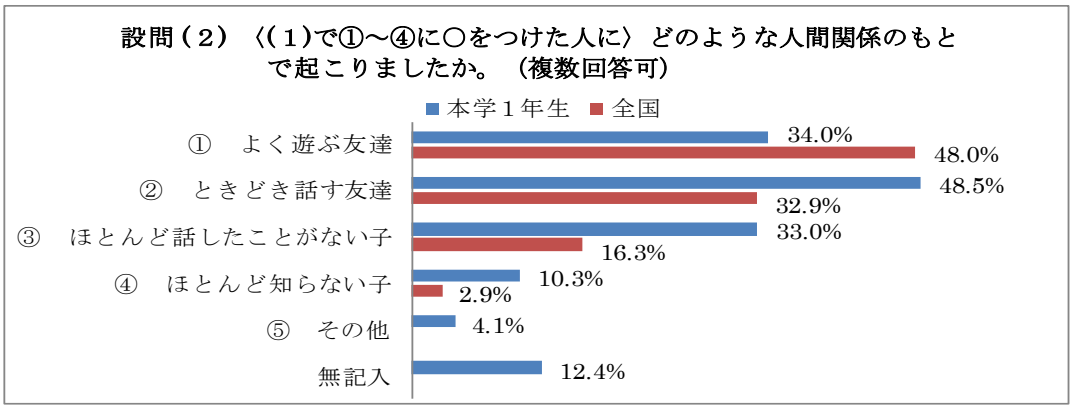
（１）「いじめ」体験について



本学の学生のいじめ体験を全国と比べると、「いじめに参加したことがある」が少ないが、「いじめを受けたことのある」は同じぐらいある。学生の場合も、全国的にも、ほとんどが、ほとんどが、なんらかの形でいじめに関わった経験をもっている。

（2）「いじめ」は、どのような人間関係のもとで起こるのか

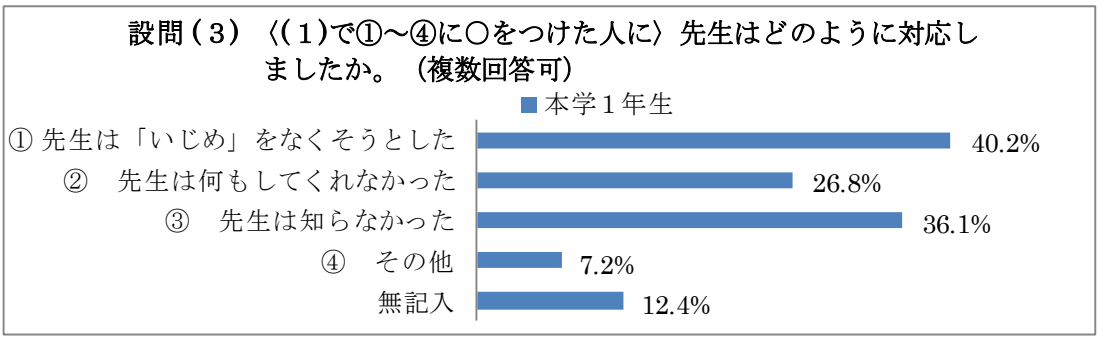
いじめは、特定の人間関係のもとで発生する。下表に示すように、とりわけ、よく遊ぶ友達、ときどき話す友達、ほとんど話したことがない子、ほとんど知らない子といったような順番で、いじめを受ける確率は上がっている。つまり、いじめは、とても身近にいる人たちの間で、親密な関係を前提として起こる事柄なのである。こうした傾向については、本学の調査と全国調査に差異はない。強いて言えば、全国調査のほうが、本学の調査より、より親密な関係のもとでいじめが発生している。



(3)「いじめ」に対する教師の対応

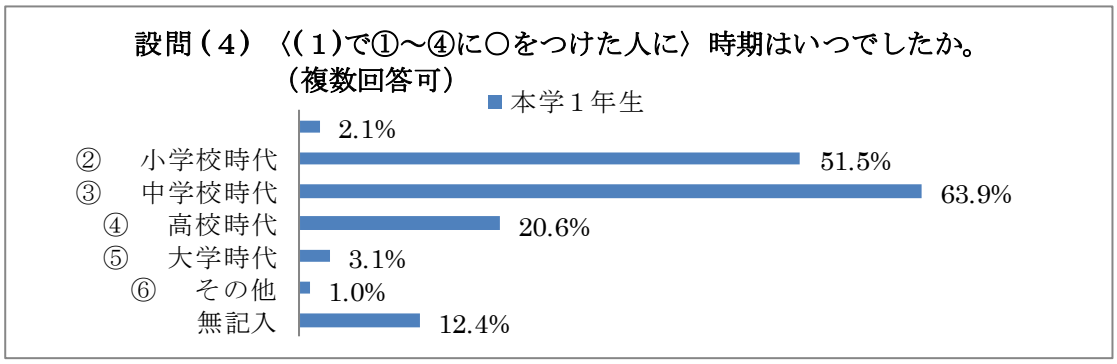
設問(3)に対する回答が示すように、いじめをなくそうとしてくれた先生はいるが、半分以上の子どもや生徒は、「先生は何もしてくれなかった」、「先生は知らなかった」と答えている。半分以上の先生がいじめに対して、消極的な対応をしており、この点は森田洋司の調査（2010）でも明らかにされている。

このような傾向については、本学の調査と全国調査に差異はない。



（4）いつ、「いじめ」は起こるのか

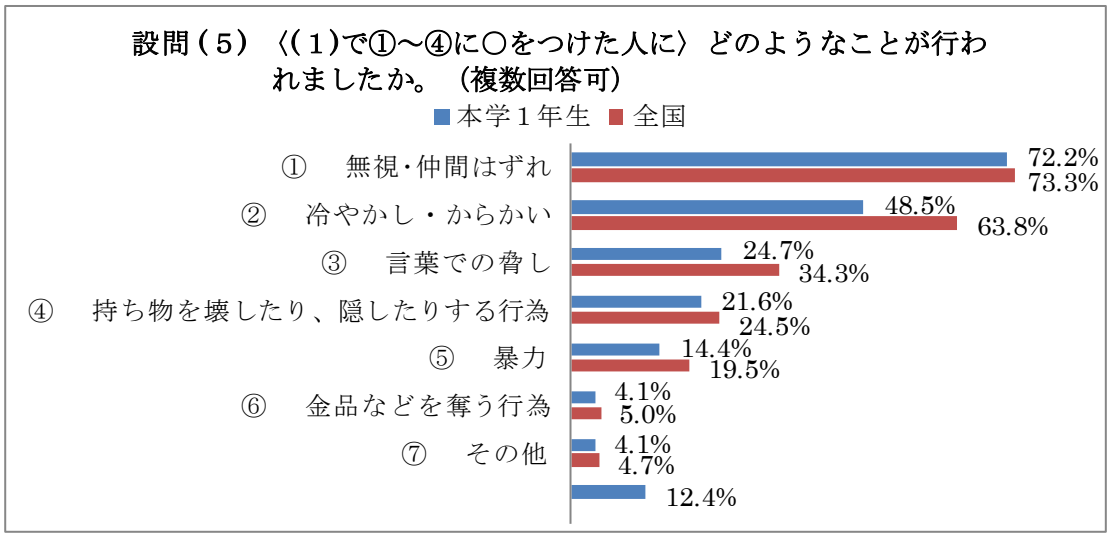
圧倒的に小学校と中学校でいじめをうけることが多い。小学校から中学校へ、ほとんどの人が受験をしないで入学し、しかも中学校は近くにあるので、小学校のときの交友関係がそのまま持続し、そこからいじめが継続されて起こることになるのではないだろうか。



尾木直樹（2007）の研究にも本学の調査とほとんど同じ結果が記されている。強いて言えば、尾木直樹の研究のほうが小学生の割合が少ないという結果になっている。どちらにせよ、小学生と中学生の時期にいじめを受ける確率が高いことが分かる。

（５）どのような「いじめ」が行われるか

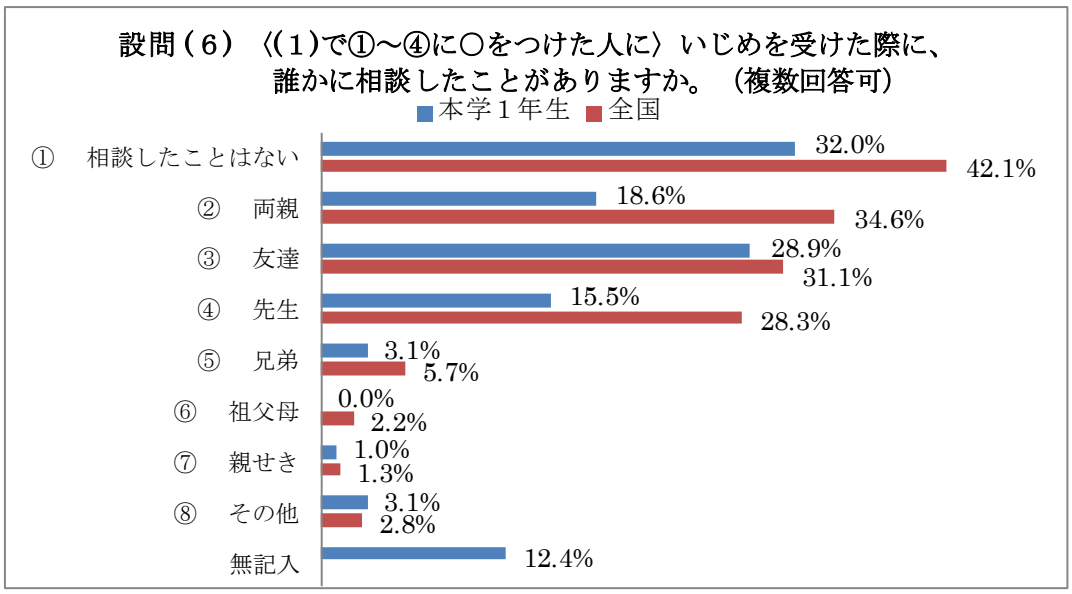
設問(5)の回答が示すように、無視や仲間外れが圧倒的に多い。それに続き、冷やかしやからかい、言葉での脅し、持ち物を壊したり、隠したりする行為、暴力、金品を奪う行為という順番になっている。近年のいじめは、この結果を見て分かるように、陰湿的ないじめが多く、暴力的ないじめは少ないようだ。



（６）「いじめ」を受けたとき、だれに相談するか

本学の調査を見ても、全国調査を見ても、「相談したことがない」という回答が一番多い。なぜか。これは、誰かに言うことによって、さらにいじめられるのではないかという恐怖があるからではないだろうか。

相談する場合には、両親、友達、先生など、とても身近にいる人に相談していることが分かる。



２．　変化する「いじめ」と最近の特徴

以上、考察してきたように、今日の日本において、いじめはとても身近にある恐怖であることが分かる。本学の学生のほとんどが、何らかの形でいじめを受けたり、加わったりした経験を持っている。いじめの内容については、かつては殴る、蹴るなどの暴力的ないじめが注目を浴び、問題にされたが、現在は無視や仲間外れ、冷やかしやからかいなどといった陰湿的ないじめに変わってきている。そのため、教師をはじめ、多くの大人たちは、いじめが起こっている事実を認識しきれてない。

さらに、いじめを取り巻く環境も変わってきている。森田洋司（2010）「いじめとは何か」に書かれているように、かつてのいじめは「被害者、加害者、観衆、傍観者」の「四層構造」になっていた。現在はどうであろうか。考えるに、今のいじめは「被害者、加害者」の「二層構造」になっているのではないか。この要因として、世界的にも社会的にも広く普及したインターネットの影響がある。さらには、いじめの内容である無視や仲間外れ、冷やかし、からかいといった陰湿的ないじめのあり方が関係しているように思われる。そして、この「二層構造」によって、いじめというものが周りから見つかりにくく、分かりづらいものになっているように思われるのである。

しかし、いじめを受けている人がいるというのは事実であり、しかも、いじめは周りから見つかりにくく、分かりづらいものになっている。教師をはじめとする多くの大人たちは、こうした新しい傾向に留意し、もっと積極的にいじめ問題に関心を持つべきである。そして、いじめを受けている人に早く気づくことができ、相談をすることのできる環境を作るべきである。

第２節　事例に学ぶ――大津市中学生いじめ事件

１．　深刻な「いじめ」、ずさんな対応

(1) 学校・教育委員会・県警の対応

大津いじめ自殺事件とは、2011 年 10 月 11 日に滋賀県大津市の中学校で悪質ないじめにより、男子中学二年生が飛び降り自殺した事件のことである。蜂の死骸を食べさせる、男子生徒の部屋を荒らし、現金を強奪する、などの非常に悪質ないじめであった。自殺する直前に男子生徒は、担任教師にいじめの相談をするが具体的対策はしてくれず、いじめを見て一緒に笑っていたという情報もある。

男子生徒の自殺後、親が滋賀県警に３回被害届けを出すが、受理されず、いじめの加害者３人とその親、そして大津市を相手に訴訟。2012 年 5 月 22 日の第１回口頭弁論で、大津市側は「いじめを苦にしてじさつしたとはいいきれない。市に自殺の過失責任はない」と発言。事件前後の学校と教育委員会の対応が問題視され、全国的に注目を浴びることになった。

（２）「いじめ」の内容――どんな「いじめ」だったのか

2011 年 10 月、自殺の原因究明のために全校生徒 860 人を対象にアンケートが行われた。

- 日常的に暴言、暴力を行う。
- 男子生徒の家の銀行口座から 45 万円以上奪う。
- 体育大会で集団リンチ。
- 自殺の練習をさせる。
- 万引きをさせる。
- 顔にペンで落書き。
- 全裸にされ射精を強要する。
- はちまきで首をしめる。

上記のような犯罪じみたいじめの内容が明らかになっていたにも関わらず、学校側は自殺といじめの因果関係は不明と発表した。

（３）事件の経過

2011 年	
9 月	被害者生徒と遺族が滋賀県子ども・子育て応援センターと滋賀県児童相談所に相談。

10 月 8 日	被害者生徒の部屋が荒らされていた。
10 月 10 日	被害者生徒が「ぼく死にます」と加害者生徒に電話。
10 月 1 1 日	午前８時ごろ、被害者生徒がマンションで転落死。遺書はなし。
10 月 13 日	遺族が中学校と大津市教育委員会に対し、在校生を対象にしたアンケートの実施を求める。
10 月 19 日	中学校が全校生徒を対象にアンケートを実施。
10 月下旬	大津署が遺族からの被害届け受理を拒否
11 月 2 日	大津市教委が緊急記者会見。いじめと自殺の因果関係は不明と発表。
11 月下旬	大津市教委が調査を打ち切る。
2012 年	
2 月 24 日	遺族が市と加害者３人に 7,720 万円の損害賠償を求め大津地裁に提訴。
5 月 22 日	第１回口頭弁論。大津市は「いじめにより自殺」を全面否定。原告側にいじめの日時や場所を特定するように求める。
7 月 14 日	中学校で実施したアンケートが公表される。
7 月 17 日	第２回口頭弁論。
7 月 18 日	大津署で加害者生徒３人を刑事告訴。 容疑は暴行罪、恐喝罪、脅迫罪、強要罪、窃盗罪、器物破損容疑罪。
8 月 14 日	京都府警が京都に転校した加害者生徒 A を傷害容疑で書類送検。
8 月 15 日	大津市教委・澤村教育長が襲撃される。
9 月 18 日	第３回口頭弁論。
11 月 27	第４回口頭弁論。加害者側は裁判で一貫していじめを否認。
12 月 11 日	澤村教育長「即日調査すべきだった」と市議会で謝罪。

２．隠ぺい・謝罪・再調査

（１）アンケートの実施・損害賠償請求訴訟

今回の事件の特徴として、いじめの悪質さや発見の遅さなどを指摘することができるが、最大の特徴は学校、市教育委員会の対応のずさんさである。大津市教委は学校で行われたアンケートでいじめの存在はわかっていたにも関わらず、いじめの存在を否定し、調査を３週間という異例の早さで打ち切っていた。それだけではなく、損害賠償請求訴訟では「自殺といじめの因果関係は不明」と徹底反論している。

アンケートではいじめが深刻だったと思われる回答がありながら、市教委は事実確認すらしていない。これでは調査に手を尽くしたとは言えないはずである。

問題は学校側がいじめとしてしっかり受け止めていなかったことだ。アンケートの回答のなかには、「先生に相談したが何もしてくれなかったと聞いた」と記されたものもあった。学校側はいじめを知りながら放置していたとみられる。こんな状況の学校に誰が自分の子

どもを預けたがるだろうか。この事件での学校・市教委の対応は、教育現場を預かる者としての責任感を感じることができず、きわめて残念である。

いじめやそれに伴う責任を認めたがらない学校や市教委の隠蔽体質をどう矯正するかが今後の課題といえる。

（2）子どもたちの課題

一方、子どもたちの側にも問題がなかったわけではない。今回のいじめの内容を見ると単なる「いじめ」という表現を超えて犯罪である。まず、「いじめ」という表現がいじめを助長させているように感じる。「いじめ」という言葉からは「わるふざけ」「じゃれあい」「いじり」の度がすぎたものという印象がある。だから子どもも教師も、「これはじゃれあいの延長線だから」と思い、誰もいじめを止めない。今回の加害者たちもそうだったのではないか。

そして、いじめられている生徒が他の人にいじめのことを相談できないのは、「いじめ」という言葉が醸し出す惨めなイメージと関係するのではないだろうか。しかし、「いじめ」と称して殴られれば、それは暴行を受けたことであり、加害者生徒は犯罪を行ったのである。今回の事件の被害者生徒は担任教師に相談したらしいが、それは被害者生徒にとって相当な覚悟の上の行動だったと思われる。

「いじめにあっている生徒は誰かに相談しよう」というのは、よくあるアドバイスだが、いじめられている子は相談できないから苦しんでいるのである。いじめの被害者にとって、いじめを受けていると認定されること自体、惨めなことなのだ。

いじめは「集団リンチ」であり、「窃盗」であり、「脅迫」である。そして、それらの行為は卑劣であり、犯罪であるという認識を、私たちは持たなくてはならない。

（以上、次のＵＲＬを参照。）

・「【大津】中２いじめ自殺事件まとめ @ ウィキ　現在までの流れ
　http://www48.atwiki.jp/tukamarosiga/pages/161.html(2012.12.20)

・「大津市中２いじめ自殺事件」
　http://ja.wikipedia.org/wiki/(2012.12.20)

第３節　「いじめ」はなくせるか

１．「いじめ」とは何か――定義の変化とその背景

(1) 文部科学省の「いじめ調査」（平成 23 度）と「いじめ」の定義

文部科学省は 2012 年 9 月、“平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査”結果を公表し、暴力行為、いじめ、出席停止、不登校、中途退学、自殺、教

育相談の実態を明らかにしている。では、今回の調査では、どのような定義にもとづいて「いじめ」を調査したのだろうか。同調査は、2007(平成 19)年を境に文科省は「いじめ」の定義を改め、2006 年以降、新意義にもとづいて行われたことを明記している。では、旧定義と新定義にはどのような違いがあるのだろうか。

まず、【旧定義】は、「いじめ」とは、「①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」としていた。

これに対し、【新定義】（平成１８年度間の調査より）は、「個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとする。「いじめ」とは、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」であると規定し、「なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」としていた。【新定義】の内容を具体的に理解するために、より詳しい説明を加えておこう。

第 1 に、「いじめられた児童生徒の立場に立って」とは、いじめられたとする児童生徒の気持ちを重視することである。

第 2 に、「一定の人間関係のある者」とは、学校の内外を問わず、例えば、同じ学校・学級や部活動の者、当該児童生徒が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童生徒と何らかの人間関係のある者を指す。

第 3 に、「攻撃」とは、「仲間はずれ」や「集団による無視」など直接的にかかわるものではないが、心理的な圧迫などで相手に苦痛を与えるものも含む。

第 4 に、「物理的な攻撃」とは、身体的な攻撃のほか、金品をたかられたり、隠されたりすることなどを意味する。

第 5 に、けんか等を除く。

文部科学省による 2011（平成 23）年度の「いじめ調査」は、以上のような定義にもとづいて行われた。次に、いじめの定義の変化と、その背景にあるいじめのタイプの変化について、杉森伸吉の論文（2012）をもとに概要を示しておこう。

（２） 「いじめ」の定義の変化

いじめは悪いことで、絶対的にあってはいけないという認識が今日の世論の主流だ。しかし、以前からそうだったわけではなく、1980 年代の後半くらいまでは、子どもにはいじめがつきものとして是認する世論が、むしろ一般的だった。裏を返せば、この頃までは、いじめがさほど深刻な社会問題にはなっていなかったともいえる。日本において、いじめに関する世論が今のような認識に転換するのに影響を与えた事件はいくつかある。

1986 年 2 月、都内の中学二年生の鹿川君が、いじめにより自殺した事件は、その最初にあたるだろう。彼は、仲間うちでも使い走りをさせられたり、殴られたりすることなどが、日常的に続いていた。彼の父親もいじめに気づき、いじめている子や親などに苦情を言う

などの努力をして、ある程度の効果も見られた。しかし、それでもいじめが進行してしまい、とうとう「鹿川君がもういないことにするいじめをしよう」と考えたいじめっ子たちが、1985 年 11 月のある朝、鹿川君のお葬式ごっこを、クラスをも巻き込んで行った。担任を含む 4 人の先生達までも、単なるおふざけと思い、乞われるままに色紙に弔辞を書いたそうだ。その後もいじめはエスカレートしていき、ついに、その三ヶ月ほど後の 2 月 1 日に、岩手県の盛岡駅のトイレで、鹿川君が首を吊って息絶えているのが発見された。

その場に遺書が残されており、彼をいじめた同級生の名前があげられ、「このままでは生きジゴクだから、自分は死ぬけれど、いじめが続いたら、自分が死んだ意味がなくなってしまうから、君たちも、もうこんな馬鹿なことは止めてほしい」という趣旨のことが書かれていた。

この事件の前年、当時の文部省はいじめ自殺が頻発したことをうけ、いじめを定義し、対策を講じるなどしていたが、いじめを否定する世論は、まだ強くはなかった。しかし、鹿川君のいじめ自殺が社会に与えた衝撃は大きく、この事件を境にいじめを強く否定する世論が形成され、いじめ問題を解決するための土台作りが進んでいった。

いじめが絶対に悪いという世論が決定づけられたといえるのは、そのほぼ 10 年後の 1994 年、愛知県の中学 2 年生の大河内君が、仲間内から日常的に多額の金銭を脅し取られたことを苦に自殺した事件だったろう。いじめによる自殺については、1985 年、1995 年と 2005 年と、ほぼ 10 年おきに大きなピークがある。なぜ 10 年おきなのかは不明だが、下表に示すように、その都度文部科学省もいじめの定義を変えている。

表：文部省／文部科学省によるいじめの定義の変遷

	1985	1986	1994	2007
関係性				
自分より弱いものに対して一方的	○	○	○	
一定の人間関係のある者				○
継続性				
身体的・心理的な攻撃を継続的に	○	○	○	
心理的・物理的な攻撃				○
相手の反応				
深刻な苦痛を感じている	○	○	○	
精神的な苦痛を感じている				○
起こった場所				
学校がその事実を確認しているもの	○			
学校の内外を問わない		○	○	○

基本的には、1985 年から 1994 年までは、「力の非対等性」、「継続性」、「深刻な苦痛」の３要素がないと、いじめとは認めなかった。しかし、2007 年には「精神的苦痛」さえあれば、「力の非対等性」と「継続性」が不問にすることになった。つまり、2007 年の定義から、「いじめられたという認識があれば、いじめである」と認めることになり、いじめの範囲

が広げられたのである。

(3)「いじめ」のタイプの変化

鹿川君のお葬式ごっこが行われた 1985 年前後を境に、いじめの特徴には次第に変化が見られた。1985 年以前の時期は、特定の子が比較的長い期間いじめられ、新聞などのマスコミを含めた世論も、いじめられる側に問題がある、という論調が多かったといえる。鹿川君は、このような状況にいた。当時はまだ、第二次世界大戦という暴力・欠乏・忍耐の時代の記憶がある人もまだ多かったので、「昔のほうがいじめがひどかった」、「いじめられるのは、いじめられるだけの理由があるからだ」と思う人も決して少なくはなかった。一方、1985 年以降は、不特定の子が短期間ずつ順番にいじめられ、世論もいじめるほうがよくないという論調に変わった。

それほど、いじめにより子どもが自殺にいたる、しかも何件も起こるということは、社会的にも大きなショッキングだった。 子どもは成長過程の遊びの一種として、じゃれあったり、ぶつかりあったりするが、手加減して限度を守るので、大人も安心して見ているところがある。さらに、小中学生になれば、動物よりも賢い人間で、それまでの集団遊びなどを通して、限度をわきまえているから、たとえいじめがあっても限度を守るだろう、という認識もあった。だから、いじめ自殺が社会に与えた衝撃は、全国で子どもに深刻な変化が起こっていると社会に感じさせ、子ども観をも揺さぶるほど大きなものだった。

特定の子が長期間いじめられる状態から、短期間に順番にいじめられるようになった変化の背景には、様々な要因がある。いじめに対する世論が変わり、特定個人を長期間いじめることが困難になったこともあるかもしれない。また、平等教育が導入されて、かけっこのゴールも一緒に行い、順位をつけないなど、本来人間がもっている多様性を直視させない教育の中で、いじめられる異質な存在を順に作り出すことで、異質性や多様性を確認するかたちで子どもが反応している可能性もあるかもしれない。さらには、人間関係が希薄化する中で、特定の個人を長期間ターゲットにすることの前提となる、「人間関係が濃密な集団」が形成されにくくなっていることを反映しているのかもしれない。

さらに 1995 年頃を境に、集団ベースから個人ベースへの変化も顕著になった。非行タイプも衝動的な「いきなり型」といわれるものが増加し、個人間の暴力も増えた。集団ベースのいじめは、無視や仲間外れなど人間関係を用いた攻撃である関係性攻撃が特徴で、男子よりも女子に多く見られる。1995 年のデータを見ると、男子は持ち物を壊すなど、直接的な攻撃が多いのに対して、女子は仲間外れや無視などの、外部からは容易に判別できないいじめが多い傾向がある。しかし、2003 年ごろには集団ベースである関係性攻撃（無視や仲間外れ）が、それまでよりも男女ともに減少（とくに男子で大きく減少）して、直接的な攻撃が多くみられるようになった。 そのような意味で、いじめが集団ベースから個人ベースへ移行する傾向が見られた。

２．「いじめ」は、なぜいけないのか

(1)　「いじめ」が始まる根本にある人間の心理

いじめの原因は、私たち人間社会のなかに存在するものなので、誰にでも起こり得るものだと考えることができる。例えば、私たちのような大学生でも、まだ幼い幼稚園に通う子どもだとしても、私たちの両親のように会社に行って仕事をしている大人でも。集団で生活し、個々の意識レベルが低いからこそ、いじめが起こるのだと思うのである。

補足するが、いじめは人間だけが起こすものではない。チンパンジーや鳥類、魚類においてさえ、いじめとされる行為が確認されている。そして、人間以外の生物は、ただの殺し合いではなく、自分と行動を共にする群れを守るため、さらに自分を犠牲にしたくないため、身体的に劣っている個体を虐げるのである。これについては、アルビノが良い例だろう。アルビノとは、普通の健常な両親から体毛が白い子どもが生まれてきた時、その個体のことを総称して、そう呼ぶのだが、アルビノとして生まれてきた個体は、健常な個体と比べ、比較的に弱く生まれてくると言われている。色のせいなのか、個体的な弱さのせいなのか、定かではないのだが、動物のいじめの場合、生存本能が最も大きく作用していると考えられている。

それに対し、人間の起こすいじめの場合、その背景には、ほかの動物にはない感情がある。一人一人の考える思考レベルが、他の動物と比べて群を抜いて高いということなのだ。自分の存在を他に伝えたい、自分の力を示したい、皆と違いたくない、助けたら次は自分、これらはいじめる側の思考なのだが、そのような思考のすべてが、いじめの心理的な原因になっているのである。

そのような心理的条件は、動物のいじめとは全く別のものだと考えられる。すなわち、人間のなかで起こるいじめの問題、これは主に、個人個人の防衛本能や集団から離れたくないことにより起こっている、もしくは、起こされているものなのである。

(2)　過去にいじめられていた子どものその後――性格、喜怒哀楽の変化

いじめ問題を具体的に理解するために、ある子どもの実体験を検討することにしよう。小学４年生の１年間と６年生の１年間、Ａ君はいじめを受けていた。Ａ君は今でも、本人はいじめられていると思っていたが、周りは思っていなかったのではないかと思っている。しかし、それを確かめるすべはもう存在しない。

いじめのきっかけは簡単で、当時仲が良かった友人を、Ａ君がいじめから助けただけだった。ところが今度は、単純すぎるほどあっさりとターゲットをＡ君に変えてきたのである。第三者の視点からは、Ａ君がいじめだったと思っているものは、単なる遊びだったり、からかっているだけに見えていたにちがいない。しかし、みんなと一緒に仲良くしたい、そんな性格のＡ君にとって、一緒に遊びたくない、話したくないという周囲の風潮ほど、辛いことはなかったのである。

では、Ａ君はその後、人生をどう進んできたのだろうか。小学生時代、中学生時代、高

校生時代に、一回でもでもいじめを受けていたことがある人は、その後の人生のなかで道を誤る可能性が高いのではないだろうか。例えば、万引き、素行を悪くする、不登校、等。また、精神的な面でも、支障をきたすことになる。鬱病や心の歪み(捻くれる、嘘吐きになる等)が生じる。

Ａ君の場合、嘘吐きになるという支障をきたしたようだ。Ａ君が初めてついた嘘は、両親に学校楽しいし友達もたくさんいる、という嘘だった。中学に通うようになって、周りに知っている人がいなくなり安心できるかと思ったのだが、３年間嘘をつき続けたＡ君は、止める事などできなかった。高校生、大学生になっても同じで、喜怒哀楽や性格は、相手にあった性格を作り出すことしかできなかった。友人だと思ってくれている人にも、心を開くことはできなかった。これがＡ君の成長の過程と結果である。

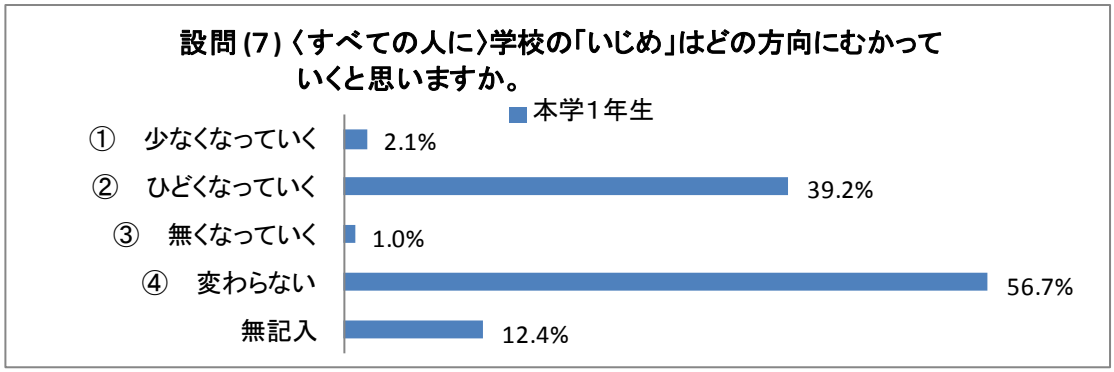
Ａ君の友人の場合、素行の悪さに走り、高校１年生の段階で腕に刺青が入っていた。喧嘩を何度も繰り返し、Ａ君に、何でこんなことになったのか自分でもよく分からないと言っていたそうだ。Ａ君の友人が受けていたいじめは、身体的なものだったらしいので、受けていたものをそのまま、自分の人生に反映させてしまったのではないだろうか。

では、いじめを受けていた人が、いじめられている人を見て、どう反応するだろうか。残念なことだが、そこから正義感は生まれない。恐怖でいじめる側に回るか、喜んでいじめるか、傍観者になるだけだろう。いじめられていた人は、いじめる側に回るようになり、そこから負の連鎖が始まるのである。

３．「いじめ」問題の解決にむけて

(1)　解決困難な「いじめ」問題

「いじめ」問題の解決は長年、社会で議論されてきたことだ。教育現場ではいじめを深刻な社会問題としてとらえ、様々な対策を講じてきた。事態を重く見た政府も、文部科学省を中心にいじめ問題に対する対策を講じたが、大した成果はないように思える。いじめ問題には決定打といえるものがないのだ。



いじめ問題の解決など、本当にできるのだろうか。本学の１年生に、「いじめ問題はどの

ような方向に向かっていくと思うか。」という内容でアンケート調査を行った。上の図が、実際のデータである。

いじめは「変わらない」「ひどくなっていく」と回答した人が圧倒的である。この結果から、学生たちのなかには、「いじめに解決」は「難しい」「無理だ」という考えが根強くあるものと思われる。理由としてはやはり、いじめ問題に対する決定打がないことや、「いじめが無くなることはない」と考える人が多いことなどが考えられる。いじめの形態は多種多様で、さらに、発覚しているものは氷山の一角である。そのため、どこから手を付ければよいのか分からない。それが、いじめ問題解決を無理だと感じてしまう要因なのではないだろうか。そう考えるとやはり、いじめ問題の解決は無理なのだろうか。

(2)　「いじめ」問題の解決にむけて

「いじめ問題の解決」について考える前に、まずは「なぜいじめは起こるのか」について考えてみようと思う。一般的にいじめはストレスが原因で起きるとされている。理由もなくいじめは発生しない。では、その理由とはどんなものなのか。尾木直樹(2007)や田口広治ら（2011）の見解をもとに論点を整理すれば、以下のようになる。

- いじめられないためにする。
- ふざけ・ムカつき・イラつき・ストレスの発散。
- 絶えず評価され、ランクづけされていることによる精神的疲労。
- 自尊心の喪失
- 遊びの機会が減少していることによるはけ口のなさ。
- 人間関係にかかわるルールがあいまいなこと。

- 集団の健康性と飛行抑止力の低下。
- 日本の学校の密室性・閉鎖性が強いこと。
- 他人に対する共感性の減少。

などが挙げられる。

では、いじめ問題の解決に対しては、現在どのような意見があるのだろうか。

- いじめの背景に潜むものは何かを把握する。
- 「本人がいじめだと訴え出れば、即いじめである」と認識すること。
- 子どもたち自身が、自らの課題として取り組む。子どもを中心として解決策をねる。
- 小さな違和感を見逃さない。

などの、様々な意見がある。

私自身も、これらの意見を見たとき、「確かに」とうなずくことができた。原因にしろ、

解決策にしろ、的を射ている意見が多いこれらの意見に賛成である。

加えて筆者は、進みすぎた競争社会が、いじめを引き起こしている原因だと考える。

競争社会においては、常に比較され、順位が出される。すると、人々の間には、他者より上へ行きたいという意識が広まる。兄弟で比較されるような場面もあることから、子どもたちは常にストレスを抱えた状態になる。子どもたちは当然、そのはけ口を求める。しかし、勉強に追われ、遊ぶ時間もとれず、ストレスを発散できない状態が続く。すると、その一部が自分と同じような能力や状態の人と結びつき、少人数のグループを形成する。そうしてできたグループは、内部もしくは外部に弱者を作り出す。この際、弱者に選ばれるのは、自分達より劣っている人だけでなく、自分達より優れた人であることもある。グループは、そうして目をつけた弱者に対して、いじめという手段を取って、内に溜まったストレスを発散する。構造はこのようなものであると考えられる。やはり、加害者が悪いのは明白だ。しかし、いじめをそのような構造だと考えるならば、もしかすると、いじめの加害者も、日本の社会構造によって生み出された「被害者」なのかもしれない。だから私は、いじめの加害者へのケアも必要なのではないかと考える。いじめ問題において、被害者への支援は当然必要なものである。しかし、加害者の心のケアをすることも、学校全体、社会全体でいじめ問題の再発を防ぎ、解決へとつなげるうえで、きわめて重要だと思われるのである。

(3)「いじめている君」、「いじめられている君」への私たちのメッセージ

最後に、私たちのゼミから、いじめに関わりのあるすべての人たちにメッセージをささげたい。

- いじめか、いじめでないか、外から簡単に見分けられるもんじゃあない。その人がいじめられてると思ったら、それがいじめなんだよ。
- 気が付いて！ いじめって恰好わるいよ。周りの人は見て見ぬふりをしないで。それもまたいじめなんだよ。
- 相手と、そして自分と向き合う姿勢をもって！
- 自殺は、復讐や逃げる手段などではありません。生きていれば変えられたかもしれない可能性をみすみす捨てないでください。強く生きて。負けないでください。
- 君は絶対にひとりじゃないよ。相談してみなよ。話すことから始めよう。
- 学校はいじめを隠さないで。大人は子どもの見本になる行動を！

このメッセージを読んでいる君がもし、いじめをしているのであれば、今この瞬間からいじめをやめてほしい。いじめをするのは格好悪いし、何より自分を傷つける。いじめをしたという君の中の罪悪感は、消えることなく付きまとう。いじめをしたという事実も消えない。だから、取り返しのつかないことにならないうちにやめよう。

このメッセージを読んでいる君がもし、いじめを受けているのであれば、これらを励み

に頑張ってほしい。理不尽ないじめに立ち向かう勇気を持ってほしい。自殺という最悪の手段を取ったとき、後に残った家族や友達は深く傷ついてしまう。死んだって楽にはならないし、世間で話題になるのもほんの少しの間だけ。君がもし、いじめをやめさせたいのなら、勇気を持とう。方法はきっとあるはずだ。

第Ⅱ章　子ども虐待のない未来をめざして

第1節　新聞記事に見る子ども虐待

(1)　両親によるネグレクト(育児放棄)

――4 歳児が死亡　両親を逮捕　母親には准看護師資格――

・ この事件は、愛知県豊橋市の元派遣社員・加藤和久容疑者（48 歳）と妻の陽子容疑者（39 歳）が、長女の杏奈ちゃん（4 歳）を病院に連れて行かないなど放置した疑いで逮捕されたもので、杏奈ちゃんは今月 20 日に死亡した。(2012 年 9 月 23 日　TBS)
・ 母親の陽子容疑者（39 歳）が准看護師資格を持っていることが 23 日、県警への取材で分かった。(2012 年 9 月 24 日「読売新聞」)
・ 杏奈ちゃんが著しく衰弱したとみられる期間に、毎月 2 万円の児童手当や子供手当を受給していたことが、市への取材で分かった。杏奈ちゃんは 2011 年 12 月に風邪を引き、衰弱して今年 3 月に自力で歩けなくなった。(2012 年 9 月 22 日「中日新聞」)

(「前から後ろから！」http：fujikko92.exblog.jp/18920161(2012.12.10)、参照)

［コメント１］

この事件を見て自分の子どもなのに世話をしないで、風邪を引いても病院には連れて行かず、母親は准看護師資格を持っているのに看病をしないで放置している。それに杏奈ちゃんが衰弱をしても児童手当や子供手当を受給していて、近所の人は異変に気付かなかったのだろうか。父親と母親はどちらとも仕事をしていなくて、自分達の好きなことをしてお金に困ってしまったので杏奈ちゃんを病院に連れて行けなかったのでこの事件が起きたのでは無いのか。

(2) 里親による子ども虐待――東京都杉並区里子虐待事件――

・ 2010 年 8 月に東京都杉並区の自宅で里子として養育していた保育園児の渡辺みゆきちゃん当時（3 歳）を虐待して死亡させたとして、警視庁捜査 1 課は 20 日、傷害致死容疑で、声優の鈴池静容疑者（43 歳）を逮捕した。
・ 逮捕容疑は 8 月 23 日夜、同区成田東 1 丁目自宅で、みゆきちゃんの顔や体を殴るなどして暴行し、急性脳腫瘍により死亡させた。
・ 鈴池容疑者は夫（42 歳）と長女（16 歳）と次女（13 歳）の 4 人家族。みゆきちゃんは家庭の事情から乳児院で育てられていたが、鈴池容疑者が杉並区の養育家庭制度に申し

込んで里親になり、2009 年 9 月に引き取っていた。

（以上、「リカちゃん声優　３歳の里子虐待死…自宅に大量の髪も」(2012.12.10)、参照）

http://www.sponichi.co.jp/society/news/2011/08/21/kiji/K20110821001454040.html

［コメント２］

この事件を見て、里親としてみゆきちゃんを引き取った容疑者は責任を持って育てることが大切なのに出来ないなら里親になるべきではないと思った。容疑者はストレスが溜まっていたと思うが、子どもに手をあげるのはいけない。容疑者は長女と次女を育てて仕事もしていたけど家庭のこともしないといけなかったから虐待をしてしまったのではないのか。

(3)　保育士による子ども虐待――埼玉県児童性的虐待事件――

- 2006 年 8 月 19 日に発覚した埼玉県における民間児童養護施設で、女性保育士が 10 代の入所少年に行った性的事件である。
- 埼玉県は同施設で複数の職員が身体的虐待を加えていた事も確認している。
- 同時期に入所していた 10 代の少女が男性指導員に性的暴行を受け、施設法人は男性指導員を 2005 年に懲戒解雇していたことが判明した。
- 埼玉県の「県こども安全課」によれば、女性保育士は 2004 年から 2005 年にかけ、少年を自宅に呼び出すなどの行為を行って性的関係を持った。別の男女職員 2 人も女性職員が少年と会う手助けをした。
- この加害者になった男性職員は 2004 年 3 月に自宅で少女に強要した。2005 年 3 月には、男性職員に手錠や玩具などを使う事を要求され、少女は逃げ出した。この事件は、2005 年 4 月 29 日に少女が宿直補助の女性職員に相談したことで発覚した。

（以上、「埼玉児童性的虐待事件」(2012.12.10)、参照）

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9F%BC%E7%8E%89%E5%85%90%E7%AB%A5%E6%80%A7%E7%9A%84%E8%99%90%E5%BE%85%E4%BA%8B%E4%BB%B6

［コメント３］

この事件を見て、子どもが好きで保育士になって働いているのではないのかと、疑問を感じる。記事には手助けをした男女職員 2 人の処分の事は何も書いていなかったが、何らかの処罰を受けるべきだと思う。

男性職員は、少女に性的強要をして手錠や玩具を使って監禁でもするつもりだったのだろう。でも、少女が逃げ出して宿直補助の女性職員に相談して良かった。

男性職員と女性職員は、子どもに何かされて嫌になって性的行為や身体的行為をしてしまったのではないのか。

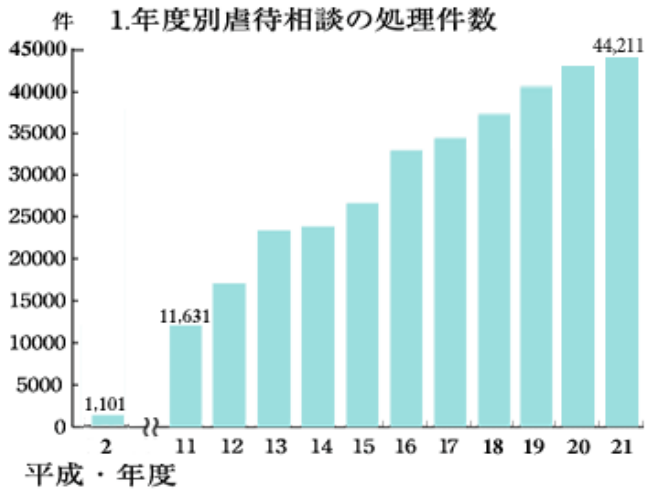
(4) 3 つの事件に関する考察

共通するのは、子どもたちは何もしていないはずなのに、虐待をした人たちは子どもに対して暴行・性的行為をしていることである。これらの事件は他にもたくさんあって、苦しんでいる子どもはまだいると思う。早めに対処することが望まれる。

第２節　子ども虐待の実態を探る

1. 増加する子ども虐待

児童虐待防止法第 5 条（虐待を受けたと思われる児童を発見した者）および児童福祉法 25 条（要保護児童を発見した場合）は、市町村、福祉事務所もしくは児童相談所への通告義務を課している。児童相談所が処理した児童の福祉に関する相談のうち、虐待に関するものが急増している。下表に示すように、児童福祉法施行前の 1999（平成 11）年度と 2009（平成 21）年度を比べてみると、3.8 倍に増加している。2009 年度の被害児童の内訳は、殴ったり蹴ったりする身体的虐待が 178 人と全体の７割を占めた。次いで、わいせつな行為などの性的虐待が 69 人、育児の怠慢・拒否（ネグレクト）が 5 人と続いた。死亡した児童（12 人）の割合は 4.8%と過去最低であった。「近隣住民などからの通報が増え、虐待が発覚しやすくなる一方で、最悪の事態になる前に迅速な対応ができるようになった」とされている。



児童虐待が社会問題として認識されるようになり、2000 年に「児童虐待防止法」が制定されたが、相談件数は増加する一方で、対応が困難なケースも多くなっている。児童虐待を厚生労働省の専門委員会の分析によると、2010 年度に心中（未遂を含む）による虐待死は 37 件 47 人、心中以外の虐待によって子どもが死亡した事例は 45 件で、該当児童は 51 人であった。年齢は３歳以下が 43 人と８割を超え、最多は 0 歳の 23 人である。2010 年度に虐待で死亡した児童のうち、痛ましいことに、３歳以下の割合が 84.3%に上り、過去最高となった。いわゆる「望まない妊娠」も一つの原因なのだろう。ただし、以上の数値は、児童相談所が扱った件数であって、実際にどのくらいの虐待が発生しているのか定かではない。データに示されていない、見えない虐待についても留意する必要がある。

子どもの虐待は、「特殊な家庭だけに起こる別世界の出来事」ではない。効率性や経済性優先の社会で生きてきた親たちは、わが子に向き合い、まったく経験のない大きなストレ

スに出会う。しかも、核家族化や地域社会における人間関係が希薄になってきているなかで、親子は孤立しがちになる。背負いきれなくなったストレスを虐待という形で子どもにぶつけてしまった親は、さらに苦しみ、自分を責め、誰にも言えず、悪循環に陥りがちになってしまう。こうしたことを念頭に置いて子ども虐待について考察することが大切になる。(以上、子どもの虹情報研究センター「児童相談所･虐待通告件数の急増現象」(2009)（http://www.crc-japan.net/contents/knowledge/b_situation.html 2012.12.15）参照)。

2. だれが、どのように、子どもを虐待するのか

(1) 子ども虐待の加害者

虐待をしているのは誰が多いのか。図１は児童相談所の統計（2002 年度をもとに誰が虐待をしているかを示したものである。母親による虐待が約 3 分の 2 を占めている。虐待に対する意識では、実母、継母は虐待を認めて援助を求めてくる率が高いのだが、実父、継父は虐待自体を認めない傾向にある。

母親による虐待が 3 分の 2 を占めている要因は、日本の子育てが、ほとんどお母さん任せになっていることからきているものと思われる。

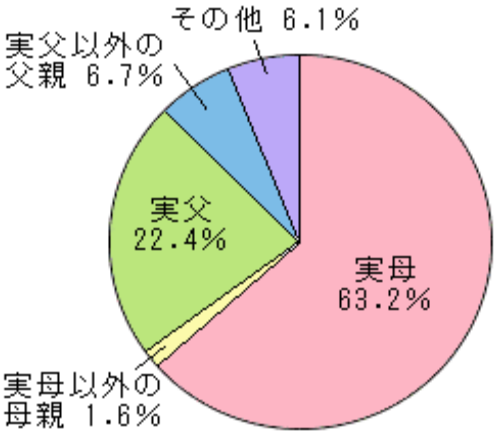


図１　子ども虐待の加害者の構成

(2) 子ども虐待の種類

では、どのような虐待が多いのか。2002 年度の児童相談所の統計（相談処理件数）では、子ども虐待の被害で一番多いのは[身体的虐待]で 46.1%。次いで[ネグレクト]（養育の怠慢、拒否）の 37.7%、[心理的虐待]の 12.8%、[性的虐待]の 3.5%と続いている。以上のように、身体的虐待が最も多く、ネグレクト（養育の怠慢、拒否）が続いている。

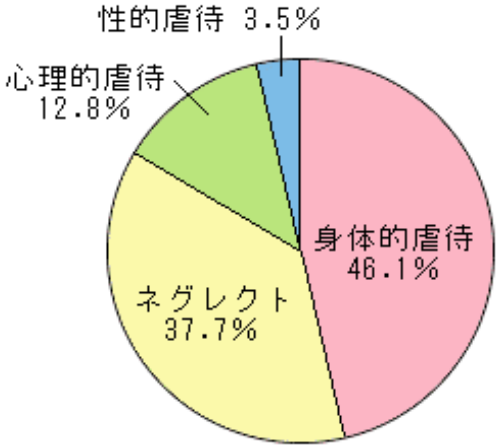


図２　子ども虐待の種類

(3) 虐待を受ける年齢

虐待を受けるこどもは何歳くらいが多いのか。同じく 2002 年度の児童相談所の統計では、就学前、すなわち、幼児期のこどもが半数を占めている

（以上、「子ども虐待とは？」http://www.paw.hi-ho.ne.jp/kosodatesos/gyakutai_01.html(2012.12.15)参照。）

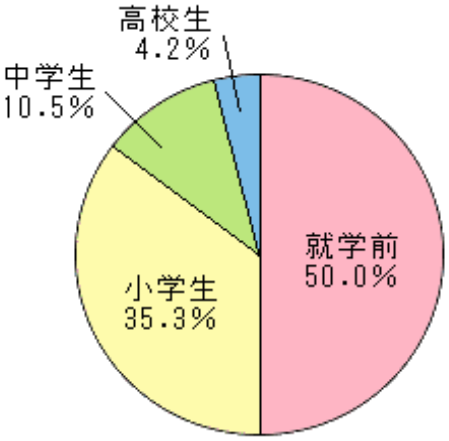


図３　虐待を受ける年齢

第３節　子ども虐待はなぜ起きるのか

１．虐待する親、虐待を受ける子ども

(1) 虐待する親の心理

中嶋雄一（2003）の調査によると、親が子どもに虐待する主な原因には、

- イライラしていた　→４１．３％
- 精神的に疲れていた　→２４．８％
- 配偶者に不満があった　→１４．６％
- 酒を飲んで酔っていた　→１４．３％
- 精神病状態　→１１．９％
- 薬物・アルコール中毒状態　→５．５％

などがある。そのほか、虐待していた親自身が虐待を受けており、安定した人間関係が持ちにくい場合や、乱暴などの親の性格、知的障害、アルコール依存、経済的困難、ストレスなどがある。これらの心理状態が重なると、虐待が発生しやすいとされている。

さらに中嶋は、自分の子どもが期待に応えてくれないと見放された気持ちになる「親子の役割逆転」や、家の中での生活が多く、話し相手がいないなどの「社会からの孤立」に注目し、そうした要因が育児不安を引き起こすため、虐待につながりやすく、なかには、虐待していることに気付かない親もいると述べている。

(2) 虐待を受けている子どもの特徴

虐待を受けている子どもの性格について、中嶋雄一（2003）によれば、

・短期で攻撃的
・落ち着きがない
・わがまま
・泣いたり、ぐずることが多い
・偏食や少食

ということが共通している。子どもの世話が大変で、とくに母親だけで育児をしている場合は、母親は大きなストレスを感じ、虐待が発生する可能性が高くなる。また、未熟児や低体重、病気、発育障害などでも、親が不安感や劣等感を持ち、育児放棄や無視につながりかねない。双子や３つ子などの多胎児の場合でも、経済的圧迫のストレスから、虐待の原因につながりやすい。

２．虐待は親から子へ連鎖するか

(1) 親の葛藤と連鎖の可能性

荻原玉味・岩井宣子(1998)らによれば、虐待をしてしまった親は、虐待をしていることに自己嫌悪になりながらも止めることができず、また、子どもの障害を周囲に理解してもらえず、ストレスを感じて虐待をしてしまうなど、多くの葛藤を抱えている。こうした保護者の葛藤が子ども虐待につながる可能性として、以下のことが考えられる。

自分が小さいころに虐待を受けたことのある親は、

…自分の子どもに虐待をしてしまう。
…人への信頼関係が持ちにくい。
…自己評価が低い。

それゆえ、安定した人間関係が持ちにくくなっている。さらに、暴力を受けた体験→自分が子どもを育てるときに無意識に再現しやすい、暴力をふるいやすくなる、などの負の連鎖が加わる。

また、自分が保育者から愛情や信頼を得られなかったため我が子との関係で満たそうとすると、親子の役割逆転が起こり、子どもが自分の気持ちに応えないと、→見放される気持ちになり、虐待へとつながることにもなりかねない。

そのような潜在的な条件に、乱暴、衝動的などの性格の問題、精神疾患、知的障害、アルコール依存などの発生要因が加わると、子ども虐待が引き起こされることになる。

(2) 連鎖がない場合

けれども、虐待を受けた子どもが親になって必然的に子ども虐待を繰り返すわけではない。なぜなら、虐待を繰り返さない親は、自分自身の被虐待経験を振り返り、また自分の子どもに対して虐待を繰り返してしまうという危険性を認識しているからである。

では、虐待は親から子へ連鎖するのか。私たちは、どちらの場合もあると思う。その理由は、保護者自身が虐待を受けていたとしても、その経験に学び、子ども虐待という行為

が危険だと認識している保護者がいるからである。その意味において、子ども時代の被虐待経験より、家庭の状況や生活習慣、社会環境の作用のほうがより重要であると考える。

(3)家庭の不和、社会的孤立

中嶋雄一（2003）によると、核家族などで日中話し相手や身近に交流できる相手がいないなど、自分の家の中での生活が中心で、地域から孤立することは、育児不安や養育上の混乱を誘発しやすく、虐待につながる可能性が高い。家庭の状況は社会環境と不可分の関係にある。家庭が、①経済的困難、②定職についていない、③夫婦の不和、④家族に病人がいる、⑤子どもの数が多い、などの問題に直面するとき、家庭生活にストレスが高まり、怒り・暴力が引き起こされる。ことになる。

また、虐待をする家庭は、夫婦関係が不安定で、かつ、一方が支配し、配偶者は服従する場合が多く、虐待が黙認されることになりやすいといわれている。

さらに、職場で人間関係のトラブルを抱える人は、仕事が長続きせず、家庭での経済的困難をもたらすことにもなりかねない。

家庭内の親子関係については、西澤哲（1994）が、ストレスなどで子どもとの関係に問題が発生すると衝動性や攻撃性が子どもに向いてしまう可能性が高い、と述べているように、家庭のストレスは虐待の発生と大きく関係している。とくに、母親の場合は、

・母親自身の依存性が高い→子供との関係に高いストレスを生じやすい。

・母親が低年齢で、社会的に未熟な状態のことが多い（初産時に 20 歳以下）→自分自身に心理的問題を抱えている場合が多く、成長のために必要な欲求や要求の満足を子どもに与えることが大きなストレスとなり、虐待につながる危険性がある。

といわれており、父親がアルコール依存症や薬物依存症にかかった経験がある場合、

・ 幼少期に兄弟姉妹に母親の愛情を奪われていたことが多い→愛情欲求を夫婦関係に求める傾向があり、

父親にとって、子どもは妻の愛情や関心をめぐるライバルとなり、結果的に子どもに攻撃をすることにもなる。

以上のことから、小さいころに虐待をされていて、人への信頼感がもてなくなってしまったから、親から子へと虐待が連鎖する、という見解を全面的に否定することはできない。しかし、そのことは、過去の経験が決定的であることを意味しない。過去を克服した事例も多くある。むしろ、子ども虐待の主要因は、過去の経験ではなく、子どもと保護者を取り巻く現在の家庭や社会、職場の状況と、そこから生まれるストレスにあるといえるだろう。その意味において、仕事や夫婦の不和、地域や社会からの孤立などとに留意することが、子ども虐待を考えることが重要であるように思われる。

第４節　子ども虐待のない未来にむかって

１．子ども虐待はなぜいけないのか

高津ゼミのアンケート調査での虐待に関する自由筆記によれば、子ども虐待は「あってはならないこと」「なくなって欲しい」「ひどい！」「子どもがかわいそう」などの意見が多かった。では、なぜ虐待はしてはならない、よくないことなのか。その意味を改めて考えてみたい。その際、以下のようなインターネットのサイトを利用した。

・「はてなキーワード＞人権侵害」
http://d.hatena.ne.jp/keyword/%BF%CD%B8%A2%BF%AF%B3%B2(2012.12.15)

・「[家族]　「虐待」から日本を考えるシリーズ（2010）変化する魂　フリートーク」
http://blog.goo.ne.jp/advanced_future/e/7f964524fa413de025bcb65d33ab8eec

・「虐待を受けた子どもの発達」
http://www.paw.hi-ho.ne.jp/kosodatesos/hattatu.html(2012.12.15)

(1)　人権侵害としての子ども虐待

虐待は子どもの人権侵害である。人権侵害とは、人が人らしく社会活動を送ること・生きる事が、何らかの人的要因によって妨害されている状態である。要するに、虐待を受けると人が人らしく生きにくくなるのだ。

虐待を受けると、心に大きな傷を生むだけではなく、心身の成長を妨げられ、対人関係で様々な問題を抱えることになる。それは虐待を受けた時期だけに係らず、将来にわたって大きな影響を及ぼす。身体的な影響で例を挙げれば、低身長低体重、免疫機能不全、自律神経系への悪影響、言葉の遅れなどである。また、情緒面での影響も顕著にみられ、不安感が強かったり、自己肯定感がもてない、怒りをコントロールできない、抑うつ的である、解離症状がでる、被害意識が強いなど、心に対してとくに影響が大であることが分かっている。

そういった心の病を抱えた人間であれば、当然、人間社会で周りから白い目で見られることも多くなり、ますます自分を追いつめてしまい、悪循環におちいってしまう。その結果、人が人らしく生きにくくなる。人権侵害を受けることになるのである。虐待は、子どもが人として等しく生きる権利、人権を侵害する行為である。

(2)社会的な負の連鎖

2011（平成 23）年度の虐待相談件数は全国の児童相談所によると約６万件。（相談件数だけで６万件なので実際に起こっている虐待はそれを大きく超えると考えてよい。）決して他

人事ではない。自分は絶対に虐待をしないとも言い切れない。虐待の最も深刻な点は、本人にその自覚がなく、精神を病む症状に本人が気づかないことが多々あることである。

まだ子育ての経験がない私たちは、感情だけで、一言で、「子どもがかわいそうだ」、「ひどい！」など思ってしまえるし、言ってしまえる。しかし、もっと主体的に、将来いつかは親になる私たちにとって、とても身近な問題なのだという自覚をもって、意識的に取りくまなければならない。社会的に見て、虐待は子どもの人格形成に大きな負の影響を与える。そして、その負は連鎖する可能性を宿している。

人間は、自分の裁量が極めて限られた環境のもとで虐げられると、自己アイデンティティを保つために、様々な試行錯誤を行う。重度な場合には、多重人格や精神分裂症なども起きるが、そこに至らぬ場合でも、何かしらの重大な影響を精神に受ける。結果として、短絡的、悲観的な行動を起こし、他者への負の連鎖（他者の幸福の拒絶）に陥ることになる。対人コミュニケーションが重要課題となっている現代の人間社会では、精神的な病は大きなハンデとなる。そして、虐待によって受けた傷、影響を取り除くのは至難の業なのである。そのため、虐待されている子どもを一人でも多く守らなければならない。親は子どもをあるがままに受け入れることが大切で、親のエゴや欲求を満たすために子どもを使っては決してならないし、自分は虐待なんてしていない、と思っていても、無意識のうちに愛のない行動をとれば、親の利己的な思惑に子どもは気づき、知らないところで傷つくものなのだ。

(3) 子どもたちの幸せを求めて

子どもは敏感である。親の一言が全てであり、親の表情に敏感であり、親がいなければ生きてはいけない。それを逆手にとって、未熟な親が子どもに対して、イライラをぶつけたり、暴力を振るったりする。それが日常的となれば、子どもが病むのは当然である。
親の言動、行動が、子どもの一生を左右することになる。

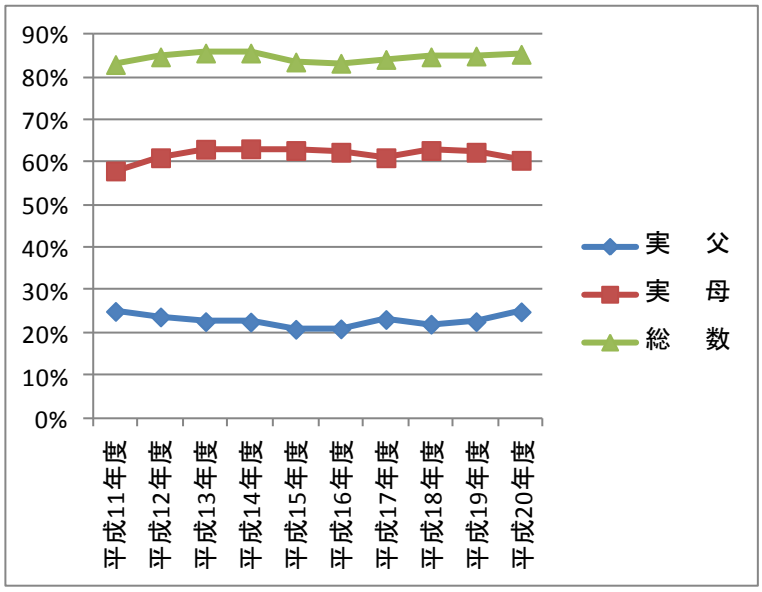
親も一人の人間なので、弱い部分があることはしかたのないこと。けれどそれ以上に、社会全体で親も含めてサポートすることが大切である。育児に悩んだ経験のある人は、現在育児に悩んでいる人の悩みに耳を傾け、アドバイスをするべきであるし、近隣で、四六時中子どもの泣きわめく声が聞こえる家があるのなら、少し気にかけて様子を見たりするべきである。

虐待が起こす社会的な負の連鎖は、社会全体で断ち切る試みがより重要になってくる。そのために私たちは、地域全体、社会全体で、育児、子どもに関心をもち、虐待がもつ問題をより重要視していかなければならない。

２．子どもを大切にする家庭・社会・地域をめざして

(1)虐待者は誰か――主たる虐待者の推移

下図は、厚生労働省 雇用均等・児童家庭局「児童虐待防止対策について」(2011年) をもとに作成したものである。実母が60.5%と最も多く、次いで実父が24.9%となっており、その他に、祖父母、伯父伯母等がいる。違和感を覚える人もいるかもしれない。しかし、主な虐待者の６割を越えているのが実母という悲しい現実を直視すべきだろう。



その理由として、母親が精神的に未成熟でいろいろな状況や気持ちをコントロールできず、そのストレスのはけ口が弱い子どもに向うことが考えられる。ただし、子ども虐待の主な原因を母親のストレスに求める見解は、「責任のすべてが母親にある」という認識を前提にしている場合が多い。

また、夫が性格・仕事・意識の低さ（父親としての自覚のなさ）など、様々な理由で子育てへの協力を怠る家庭では、母親が虐待者になりやすい。子育てに関するすべてを母親一人で抱え込むことになり、最大の理解者であるはずの父親、すなわち子育てパートナーからも重圧を受けてしまうのである。以上のように、母親の周りには不安要素がたくさん存在する。(以上、Angel Aid「今だからこそ、児童虐待について一緒に考えてみませんか？」参照。http://www.sanfujinka-debut.com/angel_aid/mam/contents/abuse/hear02.html 2012.12.15)

(2)家庭･社会･地域の課題

以上のような事態に対し、家庭や地域、社会はどのようにすればいいのか。家庭の対応については、以下のことが考えられる。

・親がストレスを子供にむけない必要がある。
・子育て上の不安を、取り除く。
・家庭環境を整える。
・親は、子育てしていく中で協力しなければならない。

政府の取り組みとしては、厚生労働省が子ども虐待をなくす啓蒙活動を行い、法令も年々改正されてきた。

・児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）の成立（2000年5月制定）
・児童虐待防止法・児童福祉法の改正（2008年4月施行）
・児童相談所運営指針等の改正（2007年1月）
・児童虐待防止法・児童福祉法の改正（2008年4月施行）
・児童福祉法の改正（一部を除き、2012年4月施行）

こうしたなか、虐待相談件数は年々増えてきている。しかし、家庭への立ち入り調査は逆に、2004（平成16）年を境に減少している。だが、このことは必ずしも虐待が無くなる方向には向かっているとは言えず、件数の増加につながっているとも見なしうる。たしかに、厚生労働省がいろいろな法令や指針を作成してはいる。しかし、必ずしも功を奏しているとはいえないのである。

では、社会や地域はどうすべきか。

厚生労働省は、2004（平成16）年の児童福祉法改正を機に「子どもを守る地域ネットワーク」（要保護児童対策地域協議会）を法定化し、さらに、2010（平成22）年の同法改正をもって、全国の市町村に対し、設置を義務化するよう要請した。2010年4月現在、全市町村の95.6%が同ネットワークを設置している（任意設置の虐待防止ネットワークを含むと98.7%）。

子どもを守る地域ネットワーク（要保護児童対策地域協議会）とは、要保護児童等（要支援児童や妊婦を含む。）の早期発見や適切な保護や支援を図ることを目的に、市町村 ― 保健機関 ― 学校・教育委員会 ― 民生・児童委員 ― 保育所 ― 民間団体 ― 児童相談所 ― 弁護士会 ― 医療機関 ― 警察 が提携し、情報や考え方を共有しながら適切に対応していく協議組織・ネットワークのことである。（以上、厚生労働省 雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策室「児童虐待防止対策について」2011年、参照）

以上のような協議組織・ネットワークが有効に機能し、問題を早期に発見するためには、近所の人も気づくことが重要であり、近所付き合いを大切にしておく必要があるだろう。（以上、厚生労働省 雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策室「児童虐待防止対策について」2011年、参照） ・
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index.html
(2012.12.15)

(3)NPO法人の役割

たとえば、児童虐待防止協会というものがある。その設立の目的は「虐待から子どもを救い、親を援助するためのさまざまな活動を行い虐待防止の社会システムを構築することを目指す。」というものであり、1990年3月、児童虐待を防止するために、日本で初めて、医療、保健、福祉、法曹、教育、報道などの関係者により創設された民間団体である。

この協会は、子ども虐待の起こる原因を、次のように考えている。

子どもの行動が気に入らないと、発達がい遅れているのではないかと疑問に思ったり、他の人は完璧に育児をしていて、自分だけがうまく子育てができていないと考えたり、自分の子どもだけがうまく育っていないと思い込む。子どもの行動で自分が評価されてしまうという自分への危機感や、自分には親の資格がないなどといった考えを抱くこともある。そこから、一人で抱え込んでしまい、親だけが責められるということにつながり、ストレスの原因になる。その結果、ストレスが溜まり、子どもに当たるということに繋がってしまう。夫婦間における亀裂、近隣とのトラブルや、経済的不安などもストレスの原因になる。しかし、子育てというのは親だけではできない。子育て中に抱える様々なストレスを絶ち、虐待を解決するためには、周囲による協力や、理解が絶対である。

児童虐待防止協会は、虐待の原因を以上のように考え、子どもの虐待ホットラインという電話相談などを通じて子育てに悩む人たちとコンタクトを取ろうとしている。

（以上、「児童虐待防止協会」。http://www.apca.jp(2012.12.15) 参照。）

以上のように、厚生労働省とＮＰＯ法人では取り組みが違う。前者は法に依存しており、それをどれだけの人が知り、活用することができているのかとを思うと、不安が残る。多分、ほとんどの国民が知らないのではないだろうか。だが、児童虐待防止協会は子どものためのホットラインなどを設置し、国民の身近なところで活動する仕組みになっている。ＮＰＯなど、民間の自発的な組織があってこそ、政府の施策は有効に機能することができるのである。

子ども虐待への対応や子育て支援を目的にしたＮＯＰは、児童虐待防止協会だけではない。オレンジリボン運動、だいじょうぶ、ブリッジフォースマイルなど、多くのＮＰＯが様々な地域で活発に活動している。こうした地域のなかで活動するこうした組織がこれからも発展し、児童相談所などと協力しながら子どもと父母の幸せに応えていくことを期待したい。

第Ⅲ章　子どもたちの未来、私たちの希望

第１節　子どもたちが将来なりたい職業

1. 希望する職業ランキング――保育士・幼児教育者の人気度――

私たちは、宝仙の１年生全体（約 100 名。以下、宝仙生と略す）に希望や将来なりたい職業に関するアンケートをとりました。宝仙の学生に今と昔とではどのように夢が変わったのか。また、昔から夢が変わらない学生がどれほどいるのかという疑問を抱き、宝仙生の小学校の頃の夢を調査することにしました。

結果として、表１を見る限り、やはり宝仙生には保育士や幼稚園教諭になりたいと子ども時代から思っている人が多く、男女共に１位となった。特に女子の４４．７％という圧倒的な結果はこの大学にあった数字となっているように思われる。

男子は、女子ほどに圧倒的とはいえない結果となったが、保育士や幼稚園教諭を目指したいと思う人も少ないということがわかった。圧倒的とは言えなかった理由として、男子の２位のサッカー選手という夢の比率が高いことが挙げられる。3 位や 4 位には、女子のなりたい夢に出てきがちな料理人やパン屋さんといった職業が挙げている。

表１：宝仙生のアンケート結果

	女	男
１位	保育士・幼稚園教諭・・・44.7%	保育士・幼稚園教諭・・・23.8%
２位	花屋・・・9.2%	サッカー選手・・・19.0%
３位	ケーキ屋・・・5.2%	料理人・・・9.5%
４位	パティシエ・・・3.9%	パン屋さん・・・9.5%
５位	バレリーナ・・・3.9%	サラリーマン・・・9.5%

この表２はベネッセ教育開発研究センターが 2009 年に全国の小４生～高２生の計 13,797 名に対して行った第２回「子ども生活実態基本調査」の結果である。宝仙生と比べると、子どもの夢として代表的な夢が挙がっている。女子の結果を見ると、2 位に保育士・幼稚園教諭の夢が挙げられており、やはり子どもが好きな女子が多いので、このような結果になったものと考えられる。

また注目するところとして、男子のアンケート結果の中には、保育士・幼稚園教諭という夢が入ってきていない。

表 2：ベネッセのアンケート結果

	女	男
1位	ケーキ屋さん・パティシエ・・・6.6%	野球選手・・・10.4%
2位	保育士･幼稚園教諭・・・6.4%	サッカー選手・・・6.3%
3位	芸能人・・・4.7%	医師・・・2.0%
4位	看護師・・・3.4%	研究者・大学教員・・・1.9%
5位	デザイナー（ファッション）・・・3.3%	大工・・・1.9%

その代わりに挙げられた夢として、野球選手や、サッカー選手といったスポーツ選手になりたいという男子が多く、上位に挙げられている。この点は、注目すべきところだろう。やはり、全国の小学生男子の夢の中には、保育士・幼稚園教諭の文字は入ってなくて、保育士・幼稚園教諭になりたいと思う人は少ないという結果が見られたのである。

以上のように、宝仙生の結果と、ベネッセの調査結果を見比べると、男女共に共通点と相違点が存在する。

しかし、留意すべきは、表 1 では記されていないが、宝仙生の全員が小学生のとき夢を持っていたとは言えないことである。なぜかというと、男女を合わせ 7、8 名ほどの学生が、「特に夢がなかった」や、無記入といった結果が出ていた。本当に夢がなかったのか、それとも、小学生の頃の夢を忘れてしまったのか、はたまた、この質問自体に興味が無かったのか、結果を見ただけでは何が理由かわからないが、そういう人もいたことにも注目しておくべきだろう。この点は、ベネッセの調査とも共通していて、同調査は、「2004 年に比べて、なりたい職業が「ある」と回答して子どもが減少している。とくに高校生において減少幅が大きく、2004 年に比べて、15 ポイント減少がみられた」と述べている。

宝仙生の進路選択については、表 1 で保育士・幼稚園教諭になりたいと答えなかった人たち、つまり 2 位以下の人が、保育士・幼稚園教諭の道に進もうと思った時期が男女ともに多くは中学生、または高校生だったことが興味深い。この時期というのは、将来の夢を本気で考え始める時期となってくるので、この道に進もうと思った人が多かった、というように判断しうる。特に高校生は、将来の夢を決めることにより進路も変わってくるので慎重に、また本気で自分の将来について考え、保育の道、またこの「こども教育宝仙大学」に進もうと決めたのだと思われる。

2. 将来に影響を与えた人物と理由

宝仙の 1 年生全員（約 100 名）を対象にした「将来に影響を与えた人物と理由」に関するアンケート結果は、表 3 のとおりである。

「影響を与えた人物」について男女別に考えてみると、男女ともに第 1 位が保育園・幼

稚園教諭が選ばれている。私たちの大学は、保育園の保育士や幼稚園教諭を目指す人がたくさんいるので、子どもの時の経験から大きな影響を受けているのだと考えられる。

第 2 位には両親が選ばれていて、身近な存在でもあり将来のことについて会話をし、影響を受けているのだと思う。しかし、同じ 2 位でも男子に比べると女子の方が 10%以上多くなっている。

第 3 位には男子の場合、中学・高校教諭と友人を同率で挙げていて、身近な存在からの影響があるものと考えられる。女子は中学・高校教諭の比率が高くなっている。

表 3：影響を与えた人物

人物	男	女
保育園・幼稚園教諭	38.0%	48.6%
中学・高校教諭	9.5%	13.1%
両親	14.2%	24.4%
友人	9.5%	9.2%

次に、表 4 の「影響を与えた理由」について考えてみよう。

職場体験を挙げた人が、男性は 1 位、女性は 3 位となっている。実際に仕事をする中で子どもたちとふれあい、様々な仕事を経験したことで、将来のことを考えることにつながったのではないか。子どもと遊ぶのが好きだという理由は、男性が 3 位、女性は 1 位だった。表 2.で述べているように、子どもが好きな女子が多いから、このような結果になったのだと考えられる。

表 4.　影響を与えた理由

理由	男	女
保育園や幼稚園の体験	8.5%	30.2%
子どもと遊ぶのが好き	16.6%	52.6%
職場体験	42.8%	26.3%
学校教師との面談	9.2%	3.9%
親や家族との会話	4.7%	15.7%

以上のように、今回のアンケート結果を分析して、改めて、この大学には保育・幼児教育を学ぶために来ている学生がほとんどであることが分かった。それは、当然のことなのだろう。単純に子どもと遊ぶことが好きな人がたくさんいることも分かった。また、職場体験からも影響を受けて将来の職業につなげている人が多く、このつながりはとても大切なことであることが分かった。学校の授業として職場体験をやることにより、自分が将来何の職業につくのか、明確になるので、この職場体験を無駄にしてはならない。また、両親や友人といった身近な存在もやはり大切であることも再認識することができた。

希望学の研究に従事している玄田有史（2006）によれば、将来なりたい職業の希望を具体的に持っていた人は、やりがいのある仕事に就いているとのことである。最近では、安定した職業よりもやりがいのある仕事がしたいと考える人が増えている。職業の希望を明確に持っていた人の方が、やりがいのある仕事に出会いやすいという事実は、私たちにとって、希望の意味を考えるときの重要な指摘であるように思われる。

第２節　逆境に育つ子どもたち

１．児童養護施設からの巣立ち

(1) 施設からの巣立ち

施設を卒園したＡ子は、4 月から一人暮らしを始めている。
少女の夢は保育士になること。そのために午前は保育園でアルバイトをし、午後は短大に行って保育の勉強をしている。しかし、施設を出た子どもたちの多くは、二つの壁に直面する。すなわち、「お金と孤独感」。

施設出身者は、金銭的な援助はなく、学業との両立に挫折する者が多いのが現状である。施設を一歩出たときから、何をするにも独力で対応せねばならず、日常の疑問を相談する相手が身近にいなのだ。

だから、A 子も卒園が近づくと、施設内の一室で一人暮らしの経験をするため、「一人で生きる」練習に励んだ。

A 子が高校 3 年生の秋、指定校推薦で短大の夜間部に進学することが決まった。施設で暮らす子は推薦入学を選ぶことが多い。アルバイトや奨学金申請、部屋探しなど、今後の準備に時間をかけることができるからだ。

ある時、施設の先輩の助言で NPO「エンジェルサポートセンター」が催す自立支援プログラムに参加した。年に 3 回開催され、お金の使い方や貯め方を教えてらったりした。さらに全 3 回参加すれば、特典として冷蔵庫とスーツがもらえるのだ。全てに参加し終えたＡ子は、晴れ晴れした笑顔で決意表明した。

（以上、「いま子どもたちは施設を巣立つ」『朝日新聞』2012 年 4 月 25 日、参照）

(2) 自立を支えるエンジェルサポートセンター

この組織は、社会的な支援のもとで生活する児童の自立支援を行う特定非営利活動法人（NPO 法人）である。同センターでは、自立生活へのスムーズな移行ができるよう、施設や里親家庭で生活をしている中学生、高校生に「自立支援プログラム」を提供している。さらに、児童の自立に寄与することを目的として、児童福祉施設への情報化支援、職員研修、調査・評価活動などを行っている。主な活動範囲は東京都内である。

エンジェルサポートセンターの実施する「自立支援プログラム」は、1999 年からアメリカで実施されている自立支援プログラムを参考に、日本の生活環境に適合した内容にアレンジをしたもので、2003 年から毎年、児童養護施設で生活する中学生と高校生を対象に行っている。内容は「成長・自己実現」、「衣食住・社会生活」、「社会性・コミュニケーション」などで構成され、これらの習得を目標にしたトレーニングや、金融機関・

市役所などの社会資源に関する知識、将来の目標を明確にする方法などについて、体験的に学習する。（以上、NPO 法人「エンジェルサポートセンター」http://angel-npo.org/ (2012.12.10) 参照。）

(3) 児童養護施設の子どもたちの希望する職業

下の表は、児童養護施設の子どもが希望する職業である。では、一般家庭の子どもが

	会社、役所勤務	工場勤務	商店、デパート勤務	農業、漁業、林業、酪農等	先生、保育士、看護師等	運転士、船乗り、パイロット等	美容師、理容師	飲食業、調理等	スポーツ、芸媒、芸術	警察、消防、自衛官	大工、建築業	新聞記者、アナウンサー	医者、弁護士	その他	未定
男(3737人)	5.7	11.8	2.6	2.4	4.8	4.1	2.2	8	12.1	3.2	7.5	0.2	0.8	11	21.2
女(3480人)	3.9	2	5.5	0.9	20.9	0.3	6.8	9.3	8.4	0.6	0.5	0.3	0.9	18.8	18.8

（単位は%。中 3 以上。2008 年、厚生労働省調べ。「いま子どもたちは施設を巣立つ」参照」）

希望する職業はどうだろうか。第Ⅲ章第 1 節で示したように、ベネッセ調査（2009）によれば、小学生女子の第 1 位がケーキ屋さん・パティシエ（6.6%）、第 2 が保育士・幼稚園教諭（6.4%）、第 3 位が芸能人（4.7%）であった。同調査では、男子の場合は、小中高校をとおして、いずれの段階でもベスト・テンにランクされていないが、女子については、小中高校のすべての段階で志望する職業のベスト・ワンになっている。保育士や幼稚園教諭は、子どもたち、とくに女子にとって憧れの職業なのだ。

こうした傾向は、「13 歳のハローワーク　人気職業ランキング(2012.年 11 月 1 日～11 月 30 日)」http://www.13hw.com/jobapps/ranking.html(2012.12.20)にも記されていて、そこでは、第 1 位＝ナニー(ベビーシッター)、第 2 位＝プロスポーツ選手、第 3 位＝パティシエ、第 4 位＝傭兵、第 5 位＝保育士、第 6 位＝看護師、第 7 位＝ファッションデザイナー、第 8 位＝医師、第 9 位＝薬剤師、第 10 位＝漫画家となっている。

以上 2 つの調査に見るランキングは、保育士・幼稚園教諭という職業が、看護師、医者、スポーツ選手などとともに、子どもたちにとって人気であることを示している。これでわかることは、どの境遇の子どもたちも、なりたい職業、つまり夢みる職業は類似しているということだ。

けれども、児童養護施設の子どもたちの大学などへの進学率は 23%(2010 年度、厚生

労働省調べ)で、全国の高校卒業者約 77%(同、文部科学省調べ)の 3 分の 1 以下である。状況は厳しい。とはいえ、世の中の若者たちのなかには、施設出身者と同じような境遇にある者も多くいる。しかも、社会のなかに格差が広がり、多くの若者が希望を持ちにくくなっている。しかし、支援してくれる機関はたくさんあること、可能性があることを忘れないことが大切だ。なぜなら、希望というものは、人と人とのつながりのなかで育まれると思うからだ。これからも夢に向かって、ともに突き進んでいけることを願っている。

２．非行からの脱出

(1) 信じあうことの大切さ――過去の克服と未来への旅立ち

『西日本新聞』(2011 年 1 月 19 日)に、「非行少年 70 人雇用　おじさんは信じてるよ　野口義弘さん（67)」という見出しで次の記事が掲載されていた。

髪は真っ赤で顔全体にピアスをつけた 16 歳の少年が、「雇ってほしい」と訪ねてきた。

そして、面接の途中で驚きの事実を打ち明けた。「去年、このスタンドに盗みに入りました。僕は見張り役でした」。

北九州市戸畑区でガソリンスタンドを経営する野口義弘さん（67 歳）は、気まずそうに話す少年の顔を見つめた。不思議と怒りはわいてこなかった。逆に、救いたいと思った。「後のことは心配せんでいい。罪を償って、ここに戻ってきなさい」と野口さんはいった。

少年の肩を抱いて、野口さんは近くの警察署に向かった。２００１年夏の出来事だった。

１９９５年に会社を起こした野口さんは現在、北九州市内に三つのガソリンスタンドの社長をしている。非行に走った少年少女をこれまで約７０人雇い入れてきた。

きっかけは、保護司を務める妻が担当した非行少女との出会いからだ。真剣な目で「働きたい」と訴えてきとき、最初は及び腰だったが、親から見放されて育った少女の今までの人生を聞き、雇ってみることにした。その後の少女の誠実な働きぶりをみて、非行少年少女たちへの考え方が変わった。

「非行に走るのは、大人から話をゆっくり聞いてもらったことのない子ども。全部を聞いて、受け入れてあげよう」と野口さんは思った。

評判が評判を呼んだ。「あのおじさんなら助けてくれる」。若者が次々に訪ねてくるようになった。

赤い髪にピアスの少年が、野口さんのスタンドに押し入ったのは２０００年冬だった。仲間と、現金十数万円などが入った金庫を盗んだ彼らは盗みの常習犯だった。スーツに車、ほしいものは手当たり次第に盗んだ。窃盗容疑で指名手配され、少年は四国に逃げていた。名前を偽り塗装の仕事を半年続けたが、生まれ育った北九州が恋しくなり、戻ってきたといっていた。

少年に対する審判の日が来た。野口さんは家庭裁判所に寛大な処分を求める嘆願書を出し、身元保証人として少年を雇用すると申し出た。保護観察処分が決まるまでの１カ月、少年鑑別所で過ごした。少年は鑑別所から野口さんへ何通も手紙を書いた。

「もっと前に野口さんに会っていたら、こういうところに来るようなことはしなかったと思います』」「『自分自身を変えたいと思います」

鑑別所を出た後、少年はまじめに働いた。「手に職を付けて自立したい」。目標も見つけた。８カ月後、野口さんの口利きで塗装会社に採用された。

2008 年冬。真新しいスーツ姿で２３歳になった少年が、妻と赤ちゃんを連れて現れた。長男誕生の報告で、少年は今も、同じ塗装会社で働いているという。出会ったころとは別人のような姿を見ながら、あらためて確信した。「信頼され、立ち直る場所があれば、子どもは必ず変わる」と野口さんはいった。

(2) 母の信頼に応えて――非行からの脱出

信頼は人の心を揺り動かし、未来への躍動力を生む。母の信頼に応えて非行を克服した事例を紹介しよう。

杉並区在住の A 君という少年がいた。彼は、中学校時代は不良、あるいは非行少年だった。彼の回りには、5 人の友達がいて、世間から不良グループと思われていた。学校にいるときは、学校のガラスや壁を壊して遊んだりロケット花火を校長室に打ち込んだり、喫煙、飲酒、無免許運転、けんかなどを繰り返していて、すごくむちゃくちゃなことをしていた。

でも彼は、野球部に所属していて、野球だけは、真剣にやっていた。

彼の家は共働きで、父親は酒癖が悪く、毎日のように暴力をふるっていた。そして、お金がなくなったりすると、母親の財布からかってに盗んだり、彼の弟や彼からも盗んだりして、あげくには借金まで作り、A 君たちに払わせていたという、とてつもなく最低な父親だった。

だが、母親は父親と違い、毎日仕事をしていて疲れているはずなのに彼らの話を聞いてあげていたり、少しの暇があれば彼らと一緒にご飯を食べに行ったりしていて、とてもいい母親だった。

しかし、A 君は、父親が家にいるという理由で家によりつかなくなった。そして、真面目にやっていた野球部にも出なくなり、学校にもまともに行かず、ただ毎日、友達の父親の普段使っていない仕事場をたまり場として、そこに集まった。そこからの彼は、ただひたすら悪い方向にしか進まなかった。だが、彼が中学２年生のときに、彼のこれからの人生を変える事件があった。それは、他の中学生２人と喧嘩をしてしまい、近所の人に通報されて、警察署に連行されてしまったのだ。

そして、彼の母親と相手の親が警察に呼ばれて、事情聴取された。そのとき、彼の母親が「けんかは、するのは中学生だから仕方ないけど、なんで通報されるまで殴ったの！？お前がやっているのは、喧嘩じゃなくてただの暴力でしかないんだからな！！」とものす

ごい勢いで叱った。

しかし、そのあと、彼の母親が「やちゃったことは、仕方ないないし、おまえがもし、少年院や鑑別所に入ることになって、回りのやつらに色々言われても、私だけはお前の味方だからな！」と励まし、A 君はその言葉にすごく感動して、「そうか、俺には、こんなに自分のことを思ってくれていて、信頼できる人がいるんだ！」と思い、そこから A 君は、もう、母親には、迷惑かけたくない。そして、これからは、しっかり学校にも行こうと心に誓ったのだった。

このときを境に、彼は真面目に学校に行き、そして、好きな野球に専念した。

そして、三年生になり、野球の最期の大会も終わって進路について話し合った。

そこで、先生や親に「将来なりたいものとかあるの？」と聞かれ、A 君は昔から子どもと遊ぶのが好きだったので、そこで保育士になろうと決心したのだった。

そこからの彼は、高校では野球を頑張り、今は保育士になるという夢を叶えるために大学に通って頑張っている。

(3) 非行からの脱出のためには

「非行少年７０人雇用　おじさんは信じてるよ」は、元非行少女であった人が真面目に働いている姿を見て、それに心を打たれ、職を提供することによって彼女と同じような経歴を持つ非行少年や非行少女を救おうとする篤志家の物語である。A 君の場合、母親は、かつて「レディース」という女版の暴走族に入っていて、A 君と同じような体験をしていたとのことである。母親が A 君を信頼し、見捨てなかったことが、A 君を救うきっかけになった。二つの例は、信頼できる人と、信頼してくれる人がいて、そして、将来なりたいものがあり、立ち直れる場所があれば、非行からの脱出が可能であることを示している。

第３節　私たちの希望――未来にむかって

１．幸せ度・満足度チェック――保育士・幼児教育者の人気度

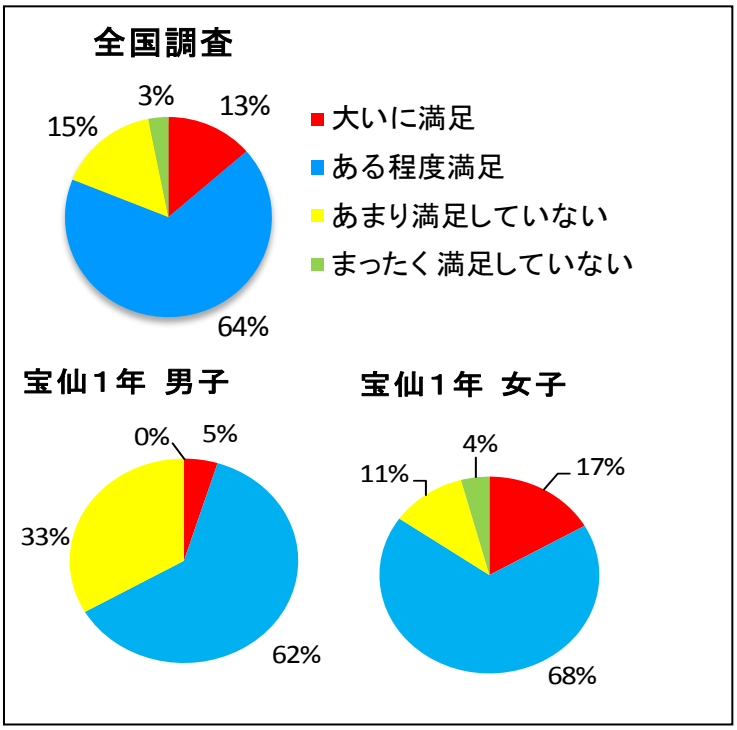
以下、生活の満足度・幸せ度を中心に、高津ゼミのアンケート調査と、『朝日新聞』の全国世論調査（2012 年 3 月 21 日）の結果を比較し、若干の考察を行なうことにしよう。

＊『朝日新聞』の調査方法

全国の有権者から 3 千人を選び、郵送法で実施した。層化無作為２段抽出法。全国の縮図になるように 339 の投票区を選び、各投票区の選挙人名簿から平均 9 人を

選ぶ。2 月 8 日に調査票を発送し、3 月 16 日までに届いた返送総数は 2362。無記入の多いものや対象者以外の人が回答したと明記されたものを除いた有効回答は 2308。回答率は 77%。

有効回答の男女比は男 46%、女 53%、無記入 1%。年代別では 20 代 11%、30 代 16%、40 代 17%、50 代 19%、60 代 20%、70 代 12%、80 歳以上 5%。



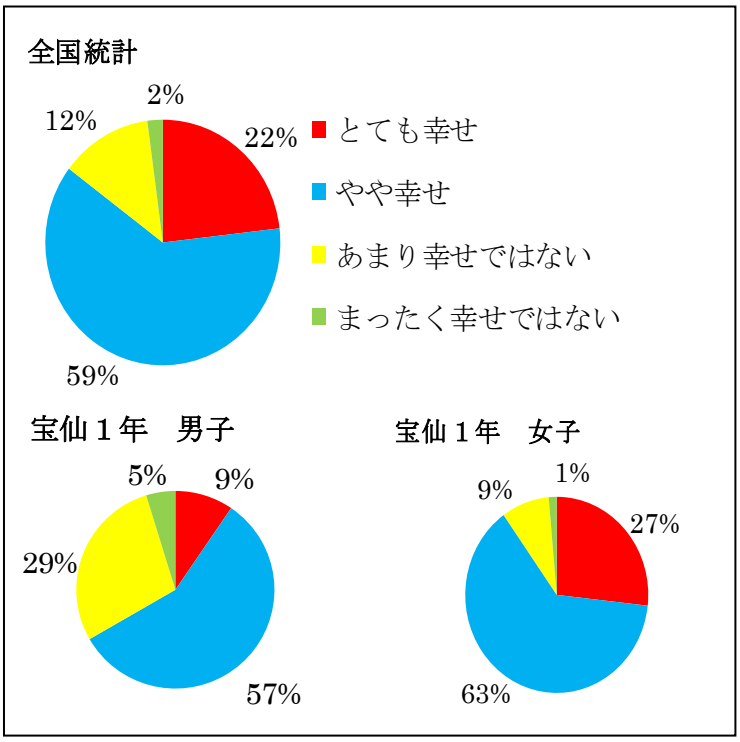
アンケート1：現在の生活にどの程度満足していますか？

◇考察

・全国統計と宝仙生の統計の差はそれ程ない。

・個人差があるが、「大いに」と[ある程度]を合わせると、現在の生活に満足している割合のほうが圧倒的に多い。

・男子学生の「大いに満足」の項目が女子学生よりかなり少ない。しかし、男子学生の「まったく満足していない」は０％である。



アンケート2：現在、幸せですか？

考察

・女子学生のほうが「とても幸せ」と感じており、幸せ度は、女子学生のほうが圧倒的に高いことがわかる。

・ただし、男女とも「まったく幸せではない」という意見は少ない。

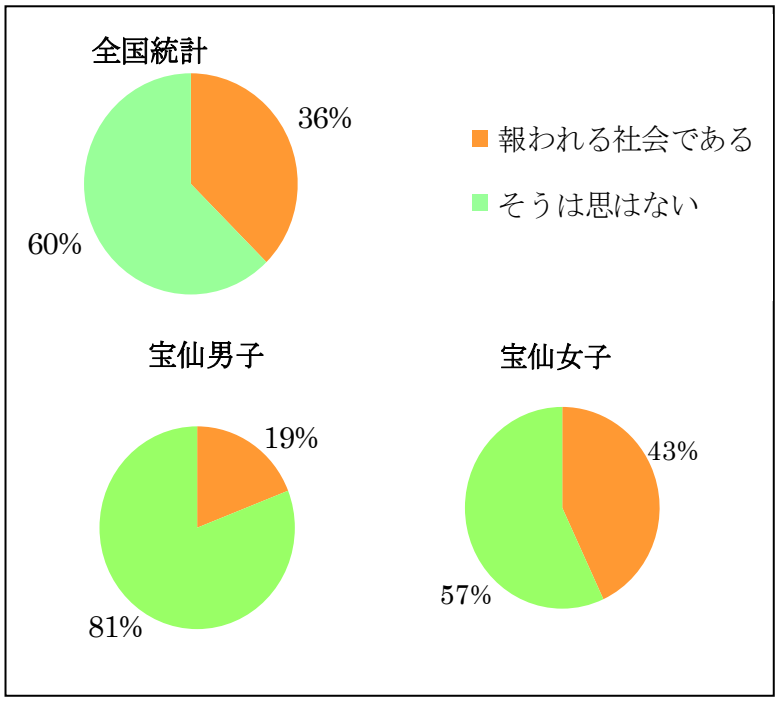
◇アンケート１・２を受けて

満足度も幸せ度も全国統計と女子学生の結果では差はないが、男子学生の結果がそれに対して低いことがわかる。この結果はなぜか、検討してみよう。

・男子学生のほうが、欲しいと思うものが高価な物が多いから手に入らず満足できない。これは、実際に宝仙で帽子集めを趣味とする男子学生がいるが「高いブランドの物だからなかなか買えない」という意見や、他にも「女性物の洋服のほうがセールなどで安く手に入る」という意見を聞くことから満足度が低いのではないかと考える。

・将来のことを視野に入れると男子学生のほうが不安要素が多いいから。これは、全国統計の対象者が成人を迎えた人で将来が見えている人が多いのに対し、男子学生では大まかな部分しか将来を想像できていなく不安が大きいのではないかと考える。

アンケート3：日本は真面目に努力すれば報われると思いますか？



◇考察

・女子学生のほうが報われると考えていることがわかる。

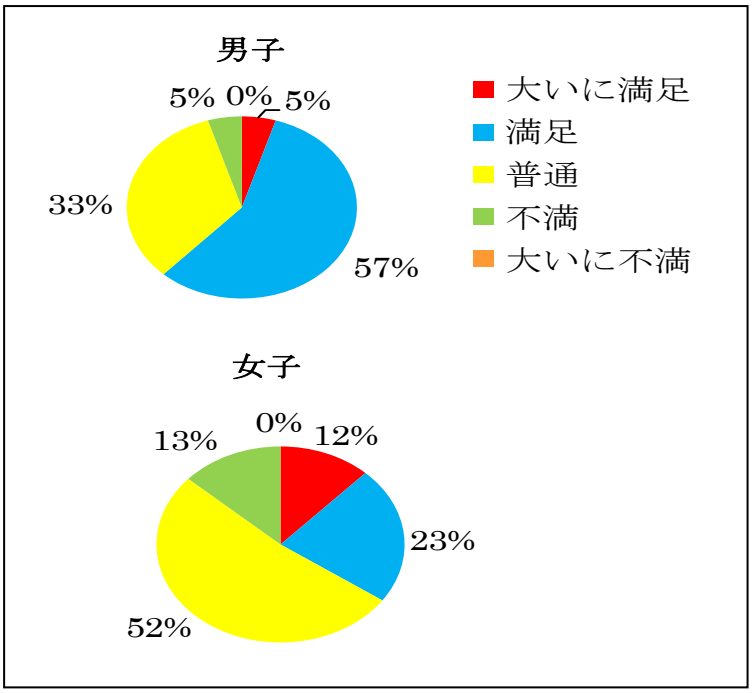
・男子学生は 81 パーセントが報われない社会であると考えている。

・報われない理由として、「現実はうまくいかない」「現実は厳しい」「現実は甘くはない」など現実を意識した意見が多かった。（※これは全て女子学生の意見）

◇アンケート３を受けて

アンケート３でも全国統計と女子学生は同傾向であるのに対し、男子学生の結果が低いことがわかる。なぜ報われないと考えるのか、これは周囲の人たちが男女で差別した考えを持っているからではないかと思う。「男性だから重いものを運ぶのが当たり前」「男性だから女性に譲ることが当たり前」などこのようなことが積み重なり負担となり報われないと考える男子学生が多いいのではないかと思う。

・アンケート４：こども教育宝仙大学に満足していますか？



◇考察

・このアンケート結果だけ満足度が女子学生のほうが全体的にみて低いことがわかる。しかし、不満というよりも普通という意見が多い。

・どちらも大いに不満の項目は０である。

◇それぞれの答えについて、出された意見・理由を示せば、次のようになる。

⑴大いに満足

・友人関係に恵まれた。

・小規模なので仲が良い。

⑵満足

・幼児教育について詳しく学べる環境である。

・ある程度満足できる授業がある。

・１年生から（体験学習）がある。

⑶普通

・小規模すぎて人との出会いがあまりない。

・校内が狭い

・施設があまり整っていない。

⑷不満

・授業中うるさくて集中ができない。

・小規模なため友人関係が面倒。

⑸とても不満

・なし

以上の調査結果から、次のようなことを指摘することができる。

・小規模な大学で濃い人間関係を築くことができ、楽しい学園生活を送ることができる反面、友達と対立してしまうリスクも少なからず抱えているということ。

・４年制になって間もないということもあり、施設が不十分であること。
・都心に近い場所にあるため、校内が狭いこと。
・男女ともに「とても不満である」という回答者はゼロであった。
・なお、すでに述べたように、アンケート３で男子学生の 81 パーセントが「日本はまじめに努力すれば報われると思いますか？」という問いに対し、否定的な回答を寄せていた。しかし、アンケート４では女子学生より男子学生のほうの満足度が高い。その理由として、男子学生のなかには本学での勉学は大変だとか、将来の就職は厳しいものがある、という意識が広がっており、したがって、友人関係についても慎重で、上手に距離を保ちながら良好な大学生活を送っているのではないか、といったことが考えられる。さらに、人数の少ない男子学生の場合、協調性が生まれやすく、団結しやすいのではないか、という推論も成り立つ。一方、女子学生では男子学生とは違い人数が多いいためいくつかのグループに分かれてしまう傾向があると考えられる。そのため、グループ内でも外でも複雑な人間関係に悩むことが多いいのではないかと考えられる。

２．保育士・幼児教育者へのみち

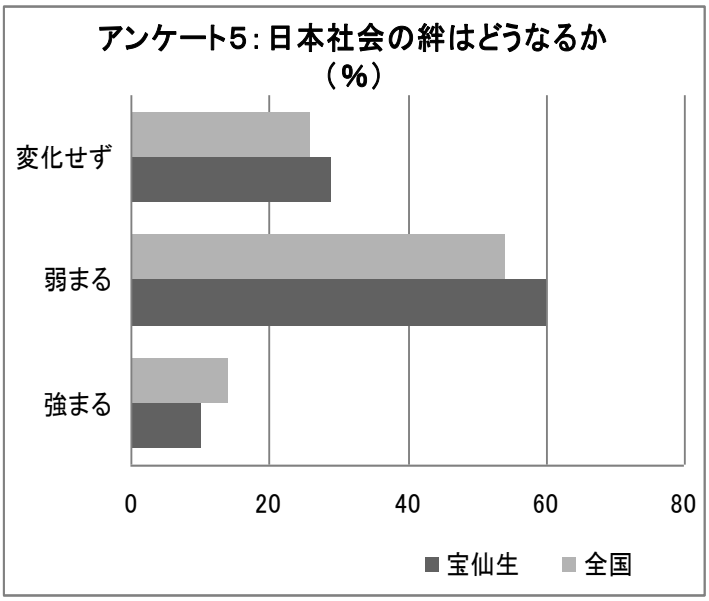
(1)　私たちが大切にしたいこと

大学生活を含む生活全体の満足度に関するアンケートの回答（自由筆記）では、「友達がいるから」とか、「新しい友人が増えた」、「友人関係に恵まれた」、「友達と話すのが楽しい」といった記述が多かった。このことは、友人の存在や友人関係のあり方が満足度を決めるうえで大きく作用することを示している。なぜだろうか。

その理由として、多くの宝仙生が、これからの日本の社会と家族の両方で、人間関係が希薄になっていくと感じていることが考えられる。こうした意識は、全国調査でも見られることなのだが、宝仙生の場合、全国調査と比較して、人間関係を回復する手立てを、家族や近所・地域社会より、友人や知人、学校や職場に期待する傾向が強い。とりわけ、友人や知人との交流関係の強化に大きな期待を託している。宝仙生が自分の生活や大学に対する満足の度合いを判断するとき、友達関係や友人とのコミュニケーションを重視する理由は、以上のような意識と関係しているように思われる。そのような考察の根拠となるデータを、以下に示しておこう。

◇アンケート５の考察

・「変化せず」と答えた宝仙生が 29%（全国 26%）、「弱まる」が 60%（全国 54%）、「強まる」が 10%（全国 14%）である。

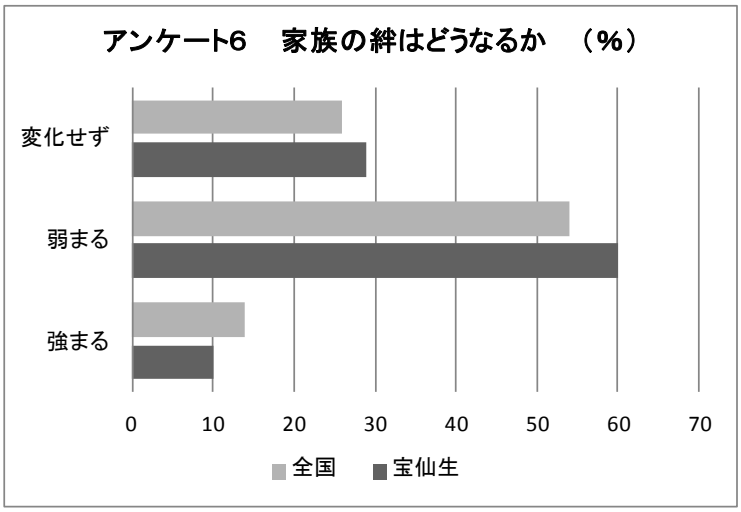


・全国調査と比較して、宝仙生のほうが「弱まる」と答えた割合が高く、「強まる」と答えた人の割合は低い。「日本社会の絆」の将来動向について、全国調査より悲観的であるといえるだろう。

では、「家族の絆」は今後どのようになると考えているのだろうか。

◇アンケート６の考察

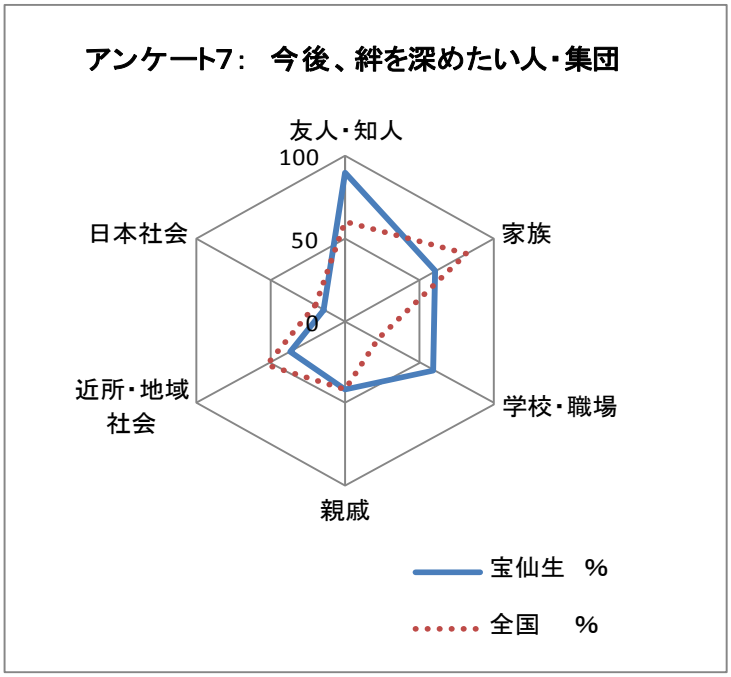
・全国調査と比較して、宝仙生のほうが、「家族の絆」は「弱まる」と答えた人の率が高く、「強まる」と答えた人の率は低い。「日本社会の絆」と同様、「家族の絆」についても、宝仙生は悲観的にとらえているといえるだろう。



以上のように、宝仙生も全国調査においても、社会、家族ともに絆は「弱まる」、「変化せず」、「強まる」の順で比率が一番高い。一般的な傾向として、圧倒的に多くの人が、絆は弱まるか、変化しないかであって、強まることはない、と考えているようである。

では、人びとは今後、どのような人や集団と絆を深めたいと考えているのだろうか。

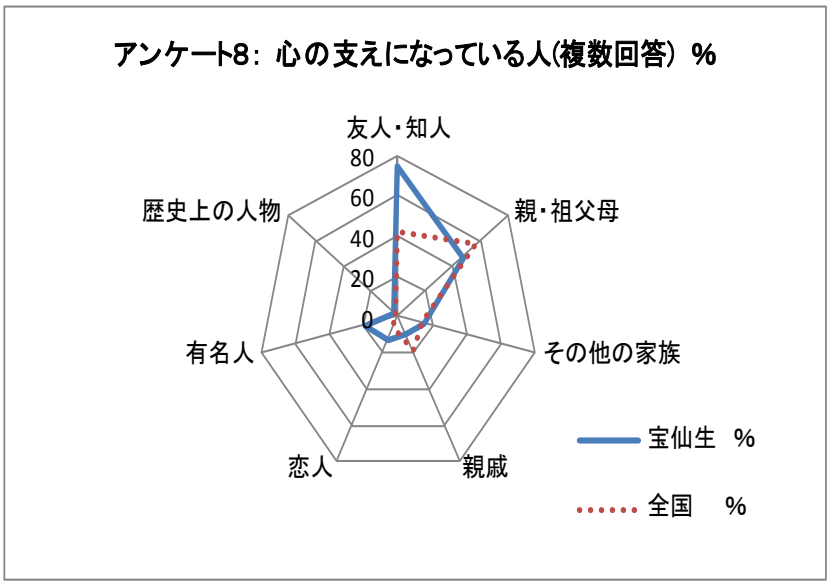
◇アンケート７考察



・宝仙生の場合、「今後、絆を深めたい人･集団」に関する回答は､「友人･知人」(90%)、「家族」（61%）、「学校・職場」(59%)､「親戚」(41%)、「近所・地域社会」（37%）、「日本社会」（14%）の順になっている。

・「友人・知人」が第１で、第２位が「家族」である。この点は、全国調査では第１位「家族」（82%）、第２位「友人・知人」（60%）であるから、宝仙生の場合とは逆の結果になっている。全国調査と比較して、宝仙生の場合は「友人・知人」への期待が際立っているといえる。今後に期待する「絆」という点では、「家族」よりも「友人・知人」を重視しているのである。

・このことと関わって、宝仙生の場合、全国調査と比較して、「学校・職場」に対する期待も圧倒的に高い。今日、日本人は職場よりも家庭を重視する方向にむかっていると指摘されているが、宝仙生の場合、家族に劣らず、学校を重視している。宝仙生は学校を、家族と同じく、生活の拠点、居場所として期待しているのだ。それに比べて、「近所・地域社会」や「日本社会」への期待は、全国調査と比べて低い。



・宝仙生は「家庭」と「学校・職場」を中心に生活を営もうとしている､といえるだろう。

では、その場合、アルバイト先や職場も含めて、そのように考えているのだろうか。アンケート８は、「心の支えになっている人」について、本学と全国調査を比較したものである。

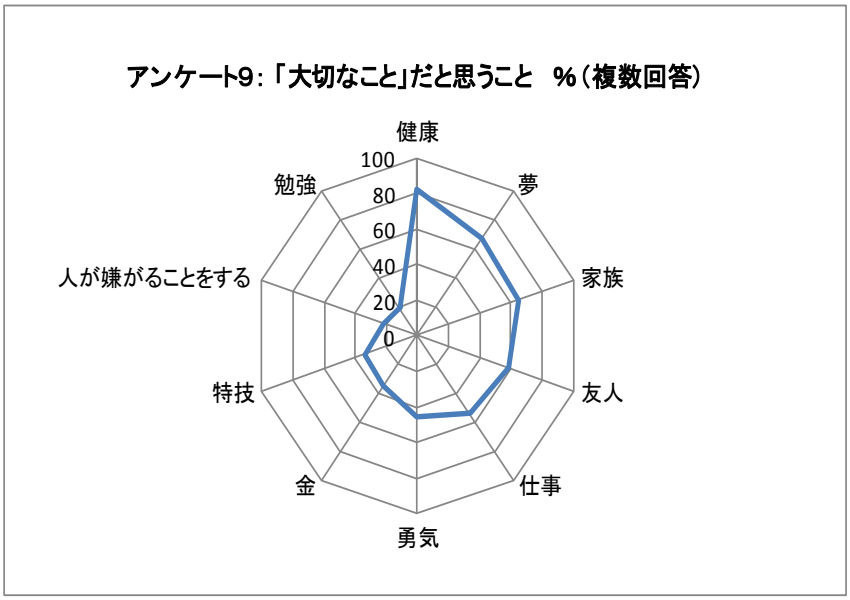
◇アンケート８の考察

・宝仙生の場合、第１位が「友人・知人」（75%）、第２位が「親・祖父母」（47%）、第３位が「その他の家族」（15%）、第４位が「親戚」（41%）、第５位が「恋人」（13%）、第６位が「有名人」（19%）、第７位が「歴史上の人物」（13%）である。

・全国調査では「親・祖父母」（57%）が第１位で、「友人・知人」（42%）が第２位。宝仙生とは逆である。このことは、「今後、絆を深めたい人･集団のアンケート結果と同じ傾向を示している。宝仙生の場合、人間関係を築くうえで、「友人・知人」を最も重視している、といえるだろう。

では、宝仙生は常日頃、何を「大切なこと」だと思っているのだろか。「勉強」か、「夢」か、「健康」か、「仕事」か、「家族」か、「友人」か、「金」か、「安定した仕事」か、「特技」か、「人が嫌がることをする」気概か。

◇アンケート９の考察

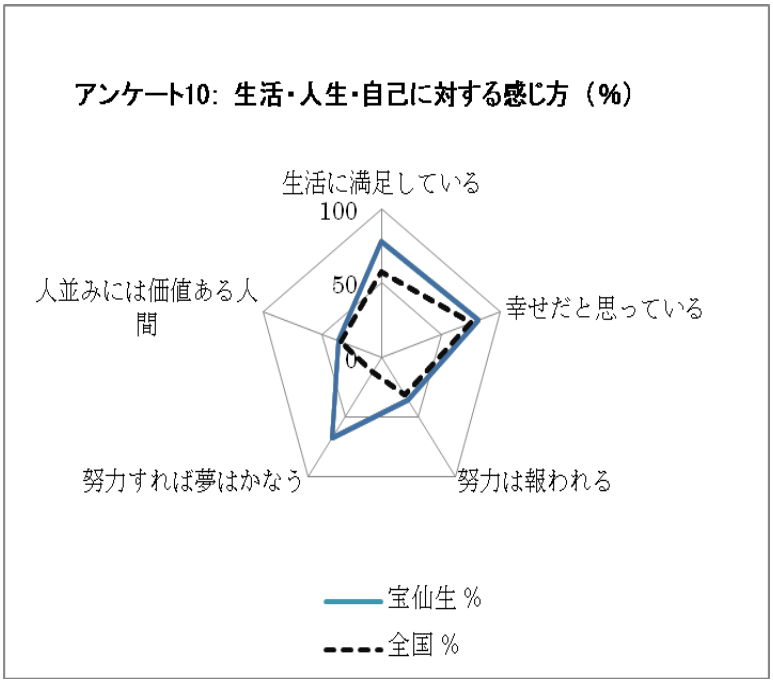


・宝仙生が「大切なこと」と思うことは、「健康」（82%）、「夢を持っている」（67%）、「家族で仲良く生活する」（65%）、「友達がたくさんいる」（58%）、「安定した仕事ˆ」（54%）、「勇気を持っている」（45%）、「お金がたくさんある」（35%）、「特技がある」（34%）、「人の嫌がることを進んでやる」（22%）、「勉強ができる」（19%）の順になっている。

・上記の集計結果から、「健康」を最も大切にしながら、「夢」を失わず、「家族」と「友人」を大切にし、「勇気」をもって「仕事」に従事する、そのような宝仙生の未来像が浮かび上がってくる。「勉強」に対しては、宝仙生はそれほど情熱をもっていないようだ。「特技」についても、養成校的な性格をもつ大学の学生としては、意外なことに、それほど上位を占めていない。

では、宝仙生はどのような自己イメージをもち、生活、人生をどのように考えている

のだろうか。人間関係のあり方、希望に関するこれまでの主要な調査項目に、自己イメージ（自尊に関する考え方）を交えて整理しておこう。



◇アンケート 10 の考察

・全国と宝仙生、ともに「幸せ」度（宝仙生、81%、全国、75%）のほうが「満足」度宝仙生、75%、全国、57%）より高い。だが、２つの指標ともに、全国より宝仙生のほうが高い。つまり、日本人全般は「満足度はほどほどだが、幸せだと思っている」のに対し、宝仙生は「生活に満足しているし、それ以上に幸せだと思っている」のである。

・全国調査では「努力は報われる」と思っている人が 31%。それに対し、宝仙生は 36%で、それほど大きな差はない。しかし、「努力すれば夢はかなう」か、という問いに対する答えは、大きく異なる。全国調査の場合、わずか 13%が肯定的であるのに対し、宝仙生は 67%が肯定的なのである。宝仙生の場合は、「努力が報われる」確率は 3 割強に過ぎないが、それにもかかわらず「努力すれば夢はかなう」と 7 割弱の人たちが思っているのである。たんに楽観的なだけなのか、それとも、報われなくてもしたたかに夢を追求し、最後にはそれに近づく、そのような粘り強さをもつ学生なのか。夢のもつ意味を深める必要があるだろう。

・自尊感情、すなわち「あなたは、少なくとも人並みには、価値ある人間だと思いますか」という問いは、『朝日新聞』の全国調査には存在しない。この項目の数値は、東京都内の３高校に通う 1 年生を対象にした古荘純一の調査（2009）から引用した。それによると、宝仙生の自尊感情に関する調査と古荘の調査はほぼ同じ数値を示している。国際的な比較では、日本の子どもの自尊感情の低さが危惧されている。宝仙生も同じ傾向があるが、国内的には、他と比べて差は存在しない。注目すべきは、生活の「満足」度、「幸せ」度、「夢」への期待度と比較して、自尊感情の指数がそれほど高くなく、アンバランスが著しいことではないだろうか。

(2) 希望にむかって――保育・幼児教育の社会的役割と私たちの願い・希望

下表は、宝仙生（1 学年）が卒業後につきたい職業（%）を示したものである。女子は保育・幼児教育関係への就職を希望する者が圧倒的に多く、男子も同傾向にある。ただし、男

子の 4 分の 1、女子の 1 割弱が養護・社会福祉施設への就職を希望しており、必ずしも単一の職業をめざしているわけではない。ただし、養護･社会福祉の分野についても、子どもを主たる対象にして活動することを想定しているとみなせば、同一の方向性にむかって歩んでいると考えることができるだろう。

宝仙生(1 学年）の卒業後つきたい職業（%）

	男子	女子	合計
保育士	50	44	48
幼稚園教諭	25	32	31
児童養護施設職員	25	8	8
他の社会福祉施設職員	0	6	5
その他	0	9	7

では、保育･幼児教育はどのような社会的役割を担うのか、私たちはどのような保育士･幼児教育者になりたいのか。こうした問題に対し、12 月 19 日の高津ゼミでは次のような意見が交わされた。

◇私たちの寄せ書き、みんなの意見

＜保育・幼児教育の社会的重要性＞

・共働きの保護者のための施設であること。就学に向けて集団生活に慣れるための機関であること。各家庭で生じる考えの差など就学に向けて同じスタートをきるための準備期間であること。人格形成の土台を作るための場であること。（A 子、その他多数）

・子どもたちの未来に大きく影響を与える場であること。（G 男）

・遊びを通して自然を学部ことができること。（K 子）

・一日の生活リズムを作る場であること。（G 子）

＜私たちの願い・希望＞

・広い視野で子どもを見られる保育者（S 男）

・保護者のケアもできる保育者（S 子）

・子どもに好かれる保育者（M 子）

・信頼される、けじめを持った保育者（AG 子）

・延長保育や、待機児童の問題を解決してほしい。（A 子）

最後に、希望をキーワードに進めてきたが今回のアンケートを通して私達学生には**友人**という新たなキーワードがあることに気がついた。大切だと思うことというアンケートに対して全国統計では家族が多いいが宝仙でのアンケートでは友人と答える割合が多かった。これは私達学生が良くも悪くも友人関係を重視している結果だと思う。そういった人とのつながり支えを大切にしながら、保育・幼児教育現場の問題に目を向けて希望を失わず成長していきたいと願っている。

＜主な参考文献･資料＞

【単行本】
・明石要一・監修　田口広治・TOSS 熊本・編著(2011)『いじめの構造を壊す原則』
　明治図書
・浅井春夫・清水玲子・牧裕子（2007）『希望としての保育』　新読書社
・尾木直樹(2007)『いじめ問題とどう向き合うか』岩波書店
・荻原玉味・岩井宣子編著（1998)『児童虐待とその対策：実態調査を踏まえて』多賀出版
・奥田圭子(2007)『子どもに聞くいじめ　フリースクールからの発信』東京シューレ出版
・玄田有史・編著（2006)『希望学』中央公論新社
・才村純（2008)『図表でわかる子ども虐待』明石書店
・ジャニス・ウッド・キャタノ（2009)「完璧な親なんていない！」ひとなる書房年
・田中美子（2010)『「いじめ」のメカニズム』世界思想社
・玉井郁夫（2001)「「子供の虐待」を考える」講談社
・土井隆義（2008)『友だち地獄――「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
・中嶋雄一（2003)『見過ごさないで！子どもたちの SOS』学習研究社
・西澤哲（1994)『子どもの虐待　子どもと家族への治療的アプローチ』誠信書房
・古荘純一（2009)『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』光文社
・古市憲寿(2011)『絶望の国の幸福な若者たち』講談社
・松本伊智朗・編著（2010)『子ども虐待と貧困』明石書店
・森田洋司（2010)『いじめとは何か　教室の問題、社会の問題』中央公論新社
・山田昌弘（2007)『希望格差社会』筑摩書房

【新聞】
・「「いじめのない社会を」「自分も受けた」　生徒死亡の中学卒業式で越市長」『朝日新聞』（滋賀県／地方版）2012 年 3 月 20 日
・「いじめ、止めるために教師は」『朝日新聞』2012 年 7 月 18 日
・伊藤茂樹「ニュースの本棚　いじめ」『朝日新聞』2012 年 9 月 9 日
・大野更紗「日本型福祉の終り」2012 年 4 月 15 日
・「震災から 1 年　本社世論調査」『朝日新聞』2012 年 3 月 21 日
・「「施設」を巣立つ①　いま子どもたちは　No.276」『朝日新聞』2012 年 4 月 25 日
・「大学生、友人よりも勉強」『朝日新聞』2012 年 12 月 7 日
・中西新太郎「ニュースの本棚　若者論をよむ」『朝日新聞』2012 年 1 月 8 日

【インターネット】
・Angel Aid「今だからこそ、児童虐待について一緒に考えてみませんか？」
http://www.sanfujinka-debut.com/angel_aid/mam/contents/abuse/hear02.html
(2012.12.15)
・Benesse 教育研究開発センター (2010)『第２回　子ども生活実態基本調査 (速報版)』(株)ベネッセコーポレーション
http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009_soku/index.html(2012.9,10)
・「大阪市、２幼児放置死事件」
http://dailynews.yahoo.co.jp/fc/local/osaka_2_children_abandoning/
(2012.11.12)
・「大阪２幼児虐待死　相談センターに抗議殺到 - 性的報道 - sexual グループ」
http://sexual.g.hatena.ne.jp/cantake/20100803/p2 (2012.11.12)
・「【大津】中２いじめ自殺事件まとめ @ ウィキ　現在までの流れ」
http://www48.atwiki.jp/tukamarosiga/pages/161.html(2012.12.20)
・「大津市中２いじめ自殺事件」
http://ja.wikipedia.org/wiki/(2012.12.20)
・「「家族」「虐待」から日本を考えるシリーズ 初め - 進化する魂」
http://blog.goo.ne.jp/advanced_future/e/7f964524fa413de025bcb65d33ab8eec
(2012.10.07)
・「[家族]　「虐待」から日本を考えるシリーズ　初め」(2010) 変化する魂フリートーク」
http://blog.goo.ne.jp/advanced_future/e/(2012.12.15)
・「『希望学』: 東京大学社会科学研究所 希望学プロジェクト」
http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/ (2012.11.13)
・「虐待の連絡や出産・子育ての悩みは「児童相談所全国共通ダイヤル」へ」
http://windy.air-nifty.com/note/2011/07/post-3a04.html(2012.10.26)
・厚生労働省「子ども虐待対応の手引き」(改正版) 2009 年 3 月 31 日
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/00.html(2012.12.15)
・厚生労働省 雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策室 (2011)「児童虐待防止対策について」
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index.html(2012.12.15)
・「子ども虐待とは？」
http : //www.paw.hi-ho.ne.jp/kosodatesos/gyakutai_01.html(2012.12.15)
・子どもの虹情報研究センター「児童相談所・虐待通告件数の急増現象」(2009)
http://www.crc-japan.net/contents/knowledge/b_situation.html (2012.12.15)

・「滋賀・大津市の中 2 自殺問題 - Yahoo!ニュース」
http://dailynews.yahoo.co.jp/fc/local/otsu_suicide/ (2012.11.20)
・「児童虐待の連鎖を打ち切りために」
http：//www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen-7821/soturonkannsei.htm(2012.12.10)
・「児童虐待防止協会」
http://www.apca.jp(2012.12.15)
・「社会復帰を阻む、心の傷「児童虐待」のトラウマに苦しむ人たち―虐待の傷を超えて」
http://diamond.jp/articles/-/7972(2012.12.15)
・杉森伸吉「[いじめの構造] 第 1 回　いじめの定義と変化」(2012.4.20)
CHID RESERCH NET　www.blog.crn.or.jp/report/02/143.html(2012.12.15)
・「ストップ！虐待>虐待をしてはいけない理由」
http://www.city.kyoto.jp/hokenfukushi/kodomosos/stopgyakutai/reasons/index.html (2012.10.07)
・NPO 法人「エンジェルサポートセンター」
http://angel-npo.org (2012.12.10)
・「はてなキーワード>人権侵害」
http://d.hatena.ne.jp/keyword/%BF%CD%B8%A2%BF%AF%B3%B2(2012.12.15)
・「非行少年 70 人雇用おじさんは信じてるよ野口義弘さん (67)」『西日本新聞』2011 年 1 月 19 日
http://www.nishinippon.co.jp/nnp/feature/article1/20100408/20100408_0001.shtml(2012.12.15)
・メディア・リサーチバンク「いじめに関する調査」(2012)
http://research.lifemedia.jp/2006/11/post_157.html(2012.07.03)
・文部科学省初等中等教育局児童生徒課「平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について」2011.9.11
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/__icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf(2012.12.15)

【アンケート用紙】

「いじめ･虐待･希望」に関するアンケート
（こども教育宝仙大学　高津ゼミ　2012 年 7 月 20 日）

このたび、基礎ゼミ３（担当・髙津）では、いじめや虐待に関する情報を自分たち自身で収集し、対応策を検討するため、アンケート調査を実施することになりました。調査対象は、こども教育宝仙大学の１年次生です。

回収した情報について、回答者個人を特定する形で処理したり、公表したりすることはありません。調査結果は、学年末に作成する報告書に掲載し、本学の図書館などで閲覧できるようにしたいと考えております。是非、アンケート調査にご協力ください。

まず、該当する性別に○をつけてください。　①女性　②男性

Ⅰ.「いじめ」について質問します。

（１）　あなたの「いじめ」体験について該当する番号に○をつけてください。（複数回答可）
① いじめを受けたことがある　② いじめに参加したことがある
③ 直接手は下さないが、観衆としてふるまったことがある
④ 見ないふりをして、かかわらなかったことがある
⑤ いじめを受けたことも、したことも、見たこともない

（２）　（（１）で①～④に○をつけた人に）どのような人間関係のもとで起こりましたか。（複数回答可）
① よく遊ぶ友達　② ときどき話す友達　③ ほとんど話したことがない子
④ ほとんど知らない子　⑤ その他（　　）

（３）（（１）で①～④に○をつけた人に〉先生はどのように対応しましたか。（複数回答可）
① 先生は「いじめ」をなくそうとした　② 先生は何もしてくれなかった
③ 先生は知らなかった　④その他　（　　）

（４）（（１）で①～④に○をつけた人に）時期はいつでしたか。（複数回答可）
① 幼稚園や保育園の時期　② 小学校時代　③ 中学校時代
④ 高校時代　⑤ 大学時代　⑥ その他　（　　）

（５）（（１）で①～④に○をつけた人に）どのようなことが行なわれましたか。（複数回答可）
① 無視･仲間はずれ　② 冷やかし・からかい　③ 言葉での脅し
④持ち物を壊したり、隠したり行為　⑤暴力　⑥金品などを奪う行為
⑦ その他（　　）

（６）（（１）で①～④に○をつけた人に）いじめを受けた際に、誰かに相談したことがありますか。（複数回答可）
①相談したことはない　②両親　③友達　④先生　⑤兄弟姉妹

⑥ 祖父母　　⑦親せき　　⑧その他（　　）

（7）（すべての人に）学校の「いじめ」はどの方向にむかっていくと思いますか。

① 少なくなっていく　② ひどくなっていく　③ 無くなっていく　④ 変わらない

（8）（すべての人に）いじめについて体験談や意見がありましたら、お書きください。

Ⅱ．虐待について質問します。

（1）あなたは虐待を受けた経験やその場所に居合わせたことがありますか。

①ある　　②ない

（2）（「ある」と答えた人に）場所はどこでしたか。（複数回答可）

①家庭　②幼稚園　③保育所　④学校　⑤福祉施設　⑥登下校途中

⑦街頭　⑧職場やバイト先　⑨その他（　　）

（3）（「ある」と答えた人に）受けたのはどのような人でしたか。（複数回答可）

①家族　②親戚　③友人　④顔見知り　⑤見知らぬ人

⑥その他（　　）

（4）（「ある」と答えた人に）受けたのはどのような年齢層でしたか。（複数回答可）

①幼児　②小学生　③中学生　④高校生　⑤成人　⑥老人

（5）（「ある」と答えた人に）虐待の内容はどのようでしたか。（複数回答可）

①保護の怠慢・拒否　②身体的虐待　③心理的虐待　④性的虐待

⑤その他　（　　）

（6）（「ある」と答えた人に）性別はどうでしたか。

①男性　②女性　③その他（　　）

（7）（すべての人に）どこからが虐待だと思いますか。

①無視　②差別　③殴る蹴る

（8）（すべての人に）親子の愛着関係を築くうえで何が大切だと思いますか。

（9）（すべての人に）あなたは虐待についてどのように考えますか。（自由筆記）

Ⅲ．人間関係のあり方について質問します。

（1）一般的にいって、「家族」の絆は強まっていると思いますか。

①強まっている　②弱まっている　③変わらない

（2）あなたは近所の人との付き合いはありますか。

①仲が良い　②少し話したことがある　③挨拶をかわすのみ

④まったく関わりがない

（3）「日本社会」の絆はどうですか。

①強まっている　②弱まっている　③変わらない

（4）今後、絆を深めていきたいと思うのはどれですか。（複数回答可）

①家族　②親戚　③友人や知人　④近所の人や地域社会

⑤学校や職場　　⑥日本社会

（5）　心の支えになっている人はいますか。

①　いる　　②いない

（6）（「いる」に○をつけた人に）その人はだれですか。

①親や祖父母　　②そのほかの家族　　③親せき　　④恋人　　⑤友人や知人

⑥有名人や芸能人　　⑦歴史上の人物　　⑧その他（　　）

Ⅳ．希望について質問します。

（1）あなたは塾に通ったことがありますか。

①はい　　②いいえ

（2）（「はい」に○をつけた人に）いつ頃、通っていましたか。（複数回答可）

①幼稚園・保育園の園児　　②小学生　　②中学生　　③高校生

（3）（すべての人に）最近、英才教育の早期化が進んでいます。どう思いますか。

①賛成　　②反対　　③どちらともいえない

その理由を答えてください。　（　　）

（4）（すべての人に）あなたの小学生の頃、将来なりたかった職業はなんですか。

①　保育士・幼稚園教諭　　②　その他（　　）

（5）（②に○をつけた人に）いつ頃、保育・幼児教育の道に進もうと思いましたか。

①小学生　　②中学生　　③高校生　　④その他（　　）

（6）（すべての人に）保育・幼児教育の道に進もうと思ったきっかけを作った人物はだれですか。（複数回答可）

①　保育園・幼稚園の先生　　②中学・高校の先生　　③両親　　④友人

⑤　その他（　　）

（7）（すべての人に）保育・幼児教育の道に進もうと思ったきっかけは何ですか。

①保育園や幼稚園の体験　　②子どもと遊ぶのが好き　　③職場体験

④学校教師との面談　　⑤親や家族との会話　　⑥その他（　　）

（8）（すべての人に）大学卒業後、あなたがつきたい職業は何ですか。

①保育士　　②幼稚園教諭　　③児童養護施設の職員　　④他の社会福祉施設の職員

⑤その他（　　）

（9）（すべての人に）あなたが「大切なこと」だと思うことはどれですか。（複数回答可）

①健康　　②友達がたくさんいる　　③夢を持っている　　④家族で仲良く生活する

⑤特技がある　　⑥安定した仕事　　⑦お金がたくさんある　⑧勇気を持っている

⑨勉強ができる　　⑩人の嫌がることを進んでやる　　⑪その他（　　）

(10)（すべての人に）いまの生活にどの程度満足していますか。

①大いに満足　　②ある程度満足　　③あまり満足していない

④まったく満足していない

(11)（すべての人に）全体的にいって、現在、幸せだと思いますか。

①とても幸せ　②やや幸せ　③あまり幸せでない　④まったく幸せでない

(12)（すべての人に）いまの日本は、まじめに努力すれば報われる社会だと思いますか。

①報われる社会だ　②そうは思わない

(13)（すべての人に）誰でも努力すれ夢は叶うと思いますか。

①そう思う　②そうは思わない（理由：　　）

(14)（すべての人に）あなたの大学での生活は楽しいですか。

①非常に楽しい　②楽しい　③普通　④楽しくない　⑤まったく楽しくない

その理由を教えてください。（　　）

(15)（すべての人に）あなたはこの大学に満足していますか。

①大いに満足　②満足　③普通　④不満　⑤大いに不満

その理由を教えてください。（　　）

(16)（すべての人に）あなたは、少なくとも人並みには、価値のある人間だと思いますか。

①そう思う　②ややそう思う　③どちらともいえない　④それほど思わない

⑤思わない

以上で終わりです。どうも有り難うございました。このアンケートに関する質問は下記のメールアドレスへ。Email：m-kozu@po2.hosen.ac.jp

【アンケート集計結果】

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
	まず、該当する性別に○をつけてください。	①女性	78%	0	76	76
		②男性	22%	21	0	21
Ⅰ「いじめ」について質問します。	(1)あなたの「いじめ」体験について該当する番号に○をつけてください。(複数回答可)	①いじめを受けたことがある	44%	8	35	43
		②いじめに参加したことがある	23%	5	17	22
		③直接手は下さないが、観衆としてふるまったことがある	29%	6	22	28
		④見ないふりをして、かかわらなかったことがある	51%	13	36	49
		⑤いじめを受けたことも、したことも、見たこともない	13%	4	9	13
	(2)((1)で①～④に○をつけた人に)どのような人間関係のもとで起こりましたか。(複数回答可)	①よく遊ぶ友達	34%	4	29	33
		②ときどき話す友達	48%	14	33	47
		③ほとんど話したことがない子	33%	7	25	32
		④ほとんど知らない子	10%	3	7	10
		⑤ その他(自由記述)	4%	1	3	4
		自由記述欄	先生。先輩・後輩。転校。男子。			
	(3)((1)で①～④に○をつけた人に〉先生はどのように対応しましたか。(複数回答可)	①先生は「いじめ」をなくそうとした	40%	7	32	39
		②先生は何もしてくれなかった	27%	7	19	26
		③先生は知らなかった	36%	5	30	35
		④その他(自由記述)	7%	2	5	7

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅰ「いじめ」について質問します。(続)		自由記述欄	自分でなんとかしろと言われた。いじめた人に直接しかった。話し合う場を作ってくれた。いじめていた子が退学。先生はしっていたのかしらなかったのかわからない。			
	(4)((1)で①～④に○をつけた人に)時期はいつでしたか。(複数回答可)	①幼稚園や保育園の時期	2%	0	2	2
		②小学校時代	52%	12	38	50
		③中学校時代	64%	12	50	62
		④高校時代	21%	3	17	20
		⑤大学時代	3%	0	3	3
		⑥その他(自由記述)	1%	0	1	1
		自由記述欄				
	(5)((1)で①～④に○をつけた人に)どのようなことが行なわれましたか。(複数回答可)	①無視・仲間はずれ	72%	11	59	70
		②冷やかし・からかい	48%	14	33	47
		③言葉での脅し	27%	8	18	26
		④持ち物を壊したり、隠したり行為	23%	4	18	22
		⑤暴力	14%	9	5	14
		⑥金品などを奪う行為	4%	1	3	4
		⑦その他(自由記述)	4%	1	3	4
		自由記述欄	一緒に遊ぶことを強制される。すな・じゃりをなげつけられる。暴言。いたずら。			

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅰ「いじめ」について質問します。(続)	(6)((1)で①～④に○をつけた人に)いじめを受けた際に、誰かに相談したことがありますか。(複数回答可)	①相談したことはない	32%	10	21	31
		②両親	19%	3	15	18
		③友達	29%	3	25	28
		④先生	15%	3	12	15
		⑤兄弟姉妹	3%	0	3	3
		⑥祖父母	0%	0	0	0
		⑦親せき	1%	0	1	1
		⑧その他(自由記述)	3%	1	2	3
		自由記述欄	鏡の向こうの自分。母親。			
	(7)(すべての人に)学校の「いじめ」はどの方向にむかっていくと思いますか。	①少なくなっていく	2%	1	1	2
		②ひどくなっていく	39%	14	24	38
		③無くなっていく	1%	0	1	1
		④変わらない	57%	6	49	55
	(8)(すべての人に)いじめについて体験談や意見がありましたら、お書きください。	自由記述欄	科学(ネットなど)が発展すればいじめはもっとひどくなる。いじめ被害者が逃げ込める場所をつくるべきだと思う。部活(小学校)で下手だったために上手な子にいじめられた。いじめられている側の人間がそれをいじめとうけとるか否かが大きな問題。周りの人が勇気をだして「いじめ」をとめるべき。			

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅲ 人間関係のあり方について質問します。	(1)一般的にいって、「家族」の絆は強まっていると思いますか。	①強まっている	29%	5	23	28
		②弱まっている	34%	7	26	33
		③変わらない	37%	9	27	36
	(2)あなたは近所の人との付き合いはありますか。	①仲が良い	35%	7	27	34
		②少し話したことがある	27%	7	19	26
		③挨拶をかわすのみ	31%	6	24	30
		④まったく関わりがない	6%	1	5	6
	(3)「日本社会」の絆はどうですか。	①強まっている	10%	4	6	10
		②弱まっている	60%	13	45	58
		③変わらない	29%	4	24	28
	(4)今後、絆を深めていきたいと思うのはどれですか。(複数回答可)	①家族	61%	9	50	59
		②親戚	41%	8	32	40
		③友人や知人	90%	20	67	87
		④近所の人や地域社会	37%	7	29	36
		⑤学校や職場	59%	14	43	57
		⑥日本社会	14%	1	13	14
	(5)心の支えになっている人はいますか。	①いる	88%	17	68	85
		②いない	11%	4	7	11
	(6)(「いる」に○をつけた人に)その人はだれですか。	①親や祖父母	47%	8	38	46
		②そのほかの家族	15%	1	14	15
		③親せき	10%	3	7	10
		④恋人	13%	2	11	13
		⑤友人や知人	75%	15	58	73
		⑥有名人や芸能人	19%	1	17	18
		⑦歴史上の人物	3%	1	2	3
		⑧その他(自由記述)	2%	0	2	2

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅲ(続)	(6)(「いる」に○をつけた人に)その人はだれですか。(続)	自由記述欄	好きな人。豊臣秀吉。九頭見鷹大。			
Ⅳ 希望について質問します。	(1)あなたは塾に通ったことがありますか。	①はい	92%	19	70	89
		②いいえ	8%	2	6	8
	(2)(「はい」に○をつけた人に)いつ頃、通っていましたか。(複数回答可)	①幼稚園・保育園の園児	5%	1	4	5
		②小学生	45%	10	34	44
		③中学生	81%	16	63	79
		④高校生	36%	7	28	35
	(3)(すべての人に)最近、英才教育の早期化が進んでいます。どう思いますか。	①賛成	23%	4	18	22
		②反対	20%	5	14	19
		③どちらともいえない	58%	12	44	56
		その理由を答えてください。(自由記述)	子どもが興味を持ったことをするならよいが、親が一方的に与えるのはおかしい。やりたければやればいい。子どもは遊ぶことが一番大切！これからグローバル化が進んでいるので将来的に必要。それぞれの家庭だと思う。早い方が身につくから。親にせかされることで子どもはストレスをかかえてしまう。才能のある人間が増える気がする。			
	(4)(すべての人に)あなたの小学生の頃、将来なりたかった職業はなんですか。	①保育士・幼稚園教諭	39%	5	33	38
		② その他(自由記述)	67%	18	47	65
		自由記述欄	料理人。スポーツ選手。美容師。			

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅳ 希望について質問します。(続)	(5)(②に○をつけた人に)いつ頃、保育・幼児教育の道に進もうと思いましたか。	①小学生	11%	3	8	11
		②中学生	23%	2	20	22
		③高校生	42%	14	27	41
		④その他(自由記述)	6%	1	5	6
		自由記述欄	幼稚園児。保育園児。浪人時代。			
	(6)(すべての人に)保育・幼児教育の道に進もうと思ったきっかけを作った人物はだれですか。(複数回答可)	①保育園・幼稚園の先生	46%	8	37	45
		②中学・高校の先生	12%	2	10	12
		③両親	25%	3	21	24
		④友人	9%	2	7	9
		⑤その他(自由記述)	27%	6	20	26
		自由記述欄	弟の保育園の先生。妹。親せきの子。いとこ。職場体験。所属している合唱団。自分。資格がほしくて。親戚。叔母。中学校の校長先生。近所の子どもたち。知り合いの子ども。虐待を受けている子どもたち。パン屋のおばさん。			
	(7)(すべての人に)保育・幼児教育の道に進もうと思ったきっかけは何ですか。	①保育園や幼稚園の体験	30%	6	23	29
		②子どもと遊ぶのが好き	56%	14	40	54
		③職場体験	30%	9	20	29
		④学校教師との面談	5%	2	3	5
		⑤親や家族との会話	13%	1	12	13
		⑥その他(自由記述)	9%	1	8	9
		自由記述欄	ボランティア。妹の面倒。子どもがなついてくれた。夢。なんとなく。虐待や子どもをとりまく環境。魔法使いになれなかったから。			

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅳ 希望について質問します。(続)	(8)(すべての人に)大学卒業後、あなたがつきたい職業は何ですか。	①保育士	60%	15	43	58
		②幼稚園教諭	39%	7	31	38
		③児童養護施設の職員	10%	2	8	10
		④他の社会福祉施設の職員	6%	0	6	6
		⑤その他(自由記述)	9%	0	9	9
		自由記述欄	おもちゃ会社。子ども関係の企業。考え中。乳児院。託児所。パティシエ。			
	(9)(すべての人に)あなたが「大切なこと」だと思うことはどれですか。(複数回答可)	①健康	82%	15	65	80
		②友達がたくさんいる	58%	15	41	56
		③夢を持っている	67%	13	52	65
		④家族で仲良く生活する	65%	11	52	63
		⑤特技がある	34%	10	23	33
		⑥安定した仕事	54%	10	42	52
		⑦お金がたくさんある	35%	4	30	34
		⑧勇気を持っている	45%	10	34	44
		⑨勉強ができる	19%	1	17	18
		⑩人の嫌がることを進んでやる	22%	7	14	21
		⑪その他(自由記述)	3%	2	1	3
		自由記述欄	差別や偏見をしない。楽しく生きる。犯罪をしない。			
	(10)(すべての人に)いまの生活にどの程度満足していますか。	①大いに満足	13%	1	12	13
		②ある程度満足	64%	13	49	62
		③あまり満足していない	15%	7	8	15
		④まったく満足していない	3%	0	3	3

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅳ 希望について質問します。(続)	(11)(すべての人に)全体的にいって、現在、幸せだと思いますか。	①とても幸せ	22%	2	19	21
		②やや幸せ	59%	12	45	57
		③あまり幸せでない	12%	6	6	12
		④まったく幸せでない	2%	1	1	2
	(12)(すべての人に)いまの日本は、まじめに努力すれば報われる社会だと思いますか。	①報われる社会だ	36%	4	31	35
		②そうは思わない	60%	17	41	58
	(13)(すべての人に)誰でも努力すれ夢は叶うと思いますか。	①そう思う	67%	11	54	65
		②そうは思わない(理由:自由記述)	31%	10	20	30
		自由記述欄	努力だけではどうにもならない。努力してもむくわれないことがある。現実は厳しい。才能も大切。あいまいな夢もある。夢の内容による。同じように努力している人がたくさんいるから。叶わないものは叶わない。そんなに上手くは行かない。現実的にそうだから。			
	(14)(すべての人に)あなたの大学での生活は楽しいですか。	①非常に楽しい	25%	3	21	24
		②楽しい	47%	15	31	46
		③普通	24%	3	20	23
		④楽しくない	4%	0	4	4
		⑤まったく楽しくない	0%	0	0	0
		その理由を教えてください。(自由記述)	友達がいる。新しい友人が増えた。みんな同じ目標に向かってがんばっている。友達がいて、学びたいことを学んでいる。たのしい時もあるけど勉強がやだ。友達が増えたし、サークルもたのしいから。自分とあわない。気楽。最近悩みができたから。友達と話すのが楽しい。			

質問	各問	選択肢,回答項目	比率	男	女	計
Ⅳ 希望について質問します。(続)	(14)(すべての人に)あなたの大学での生活は楽しいですか。(続)	その理由を教えてください。(自由記述)(続)	良い大学に通えたから。色々あんだよ。大学が狭い。まあまあだから。初めて知ることがいっぱいあるから。			
	(15)(すべての人に)あなたはこの大学に満足していますか。	①大いに満足	10%	1	9	10
		②満足	30%	12	17	29
		③普通	47%	7	39	46
		④不満	11%	1	10	11
		⑤大いに不満	0%	0	0	0
		その理由を教えてください。(自由記述)	友人関係に恵まれた。出会いが少ない。友達がめんどくさい。とにかく施設が小さい。狭い。大学の規模が小さいから。体育館がないから。小こすぎてサークルやる場所がなかったりする。満足でもないし、不満でもない。ま、それなりに。大変だったけれど頑張れるから。色々。気楽すぎる。第一希望じゃないから。通いたい大学ではないから。授業中うるさい。幼児教育について詳しく学べるから。一年の時から実習ができるから。			
	(16)(すべての人に)あなたは、少なくとも人並みには、価値のある人間だと思いますか。	①そう思う	11%	2	9	11
		②ややそう思う	25%	4	20	24
		③どちらともいえない	42%	11	30	41
		④それほど思わない	9%	2	7	9
		⑤思わない	11%	2	9	11

【ゼミの風景――宝仙祭の展示と準備活動】

あとがき

（1）

こども教育宝仙大学は、開設後 4 年を迎えた。幼児教育・保育に携わる人材の養成を目的とする４年制のカリキュラムは、保育・教育実習とともに少人数教育を重視し、必修制のゼミナールを中軸に位置づけ、1 年次に基礎ゼミ、２年次に総合ゼミ、３・４年次に専門ゼミを配置している。こうした制度設計のもと、大学は学生たちに対し、広い教養をもつ専門家として育っていくことを求めている。

一年次生を対象とする基礎ゼミは、「学問への誘い」（春学期）と「学問に触れる」（秋学期）で構成され、「大学での学びの基礎を身につける場」であるとともに、「大学生としての自立」を支える場としての役割を担っている。学生たちは、同一の教員の指導のもと、通年にわたって指定された基礎ゼミに参加し、「新しい友だちと出会い、新しい知識、新しい課題への挑戦を通して、考える力、方法、判断力を身につける」のである。ちなみに、2012 年度の基礎ゼミは、青木靖子、市村洋、恒松由記子、林隆嗣、福岡真知子の各氏と高津勝が担当した。

（2）

2012 年度「基礎ゼミ３」（以下、高津ゼミと略す）は、結果的に、年間をとして「いじめ、子ども虐待、希望」をメインテーマにかかげて実施することになった。結果的とは、教員の当初の思惑とは異なった展開をしたことを意味する。

教員側は当初、ＡＫＢ４８などの新しいアイドルを素材にし、現代社会とそこに生きる若者文化のありようを学生とともに究明しようと考えていた。だが、この目論見は、初期の段階で修正を迫られることになる。5 月末に学生たちの意見を聴取したところ、17 人中 11 人が、「いじめ、虐待」に関心を示し、他の学生たちもＡＫＢ４８やアイドル研究にそれほど強い関心を示さなかったのである。その理由として、学生たちは、「ＴＶをほとんど見ず、興味がない」（4 名）、「部活に夢中」（1 人）、「実際に見たことがなく、親しみがない」（1 人）、「好きなアイドルがいない」（1 人）、「人によって好みは違う」（1 人）といった見解を表明した。意見交換をとおして、好みが多様化しており、テレビを見ない人が増えていること、好きなアイドルにバラツキがあり、国民的なアイドルが登場する条件は存在しないことが明らかになった。このとは、テレビを中心としたマスメディアの生み出す大衆文化と若者たちとの間に亀裂が存在していることを物語る。彼ら・彼女らは、もはやテレビ世代ではないのである。

上述の私の問題関心に対し、学生たちは次のような答えを用意していた。「子どもが好きでこの大学に入ったので、やはり子どもについてやりたいです。虐待にあっている子どもがいるなんて決してあってはいけないことだが、被害にあっている子どもがいるのが現状。少しでも何か役にたてることを見つけられれば幸いだ。」「保育に関すること以外のことを学ぶことも大切だと思いますが、児童虐待の問題や、いじめの問題について深く学び

たいですし、そういうことをされて心に傷を負った子どもたちのためにわたしたちには何ができるのか、何が必要なのか、追求したいです。」「将来、幼児教育や保育の仕事につきたいと思っているので、子どもの変化を敏感に察することのできるように、「なくせ！いじめ・子ども虐待」の研究をしたい。」などなど。

もっとも、こうした見解が登場する前段には、「ハートネットＴＶ　シリーズ・貧困拡大社会「生活保護世帯の子どもたち」（ＮＨＫ　Ｅテレビ 2012 年 5 月 14 日放映）の視聴と討論があった。その意味において、学生たちの意見表明は必ずしも自然発生的なものとは言い切れず、前回のゼミの討論を反映している面もあった。しかし、圧倒的多数のゼミ参加者が、保育士・幼稚園教諭を養成する大学に入ったのだから、子どもの成長や保育・教育に関わることを学びたい、と考えていたのである。専門性への熱い志向に驚かざるを得なかった。

このような経過を経て、6 月 6 日、下記のテーマと検討課題を提案し、グループに分かれて取り組むことになった。新たなゼミの始まりである。

今に学び、明日をひらく――「生きづらさ」への挑戦

Ⅰ．探ろう！　いじめの実態・要因・深層

Ⅱ．なくせ！　子ども虐待

Ⅲ．明日への希望――さまざまな試み

・子どもたちの夢

・阻まれる夢――貧困の拡大と連鎖

・明日に向かって――自立への道

6 月 6 日を起点にして、グループ活動を基軸にしたテーマ・オリエンテッドなゼミナールが展開し始める。その後、“「生きづらさ」への挑戦”というサブ・テーマは、教師の発案により、「無縁社会から希望社会へ」に代わった。より明確に、社会研究という意味合いを含ませたかったのである。

（３）

2012 年度の高津ゼミの第２のエポックは、上述のテーマ設定にかかわるアンケートの計画と実施にあった（資料：アンケート用紙、参照）。概要を示せば、次のようになる。

・テーマ　　「いじめ・子ども虐待・希望」に関する調査

・調査日　　2012 年 7 月 20 日（「健康スポーツ実技」の最終日に実施）

・対象者　　こども教育宝仙大学 1 年生

・調査結果　　有効回答 97 件、回収率 97％（男子 21 件、女子 76 件）

このアンケートの企画と実施は、ゼミの活動を豊かにするうえで大きな役割を果たした。とりわけ、「いじめ」と「希望」の両グループの活動内容に大きな影響を与えた。それらのグループはアンケートの集計結果の分析を中心に報告書の作成に取り組むことになる。

ただし、このアンケートの実施については、医学を専攻する基礎ゼミ担当教員から、調査の倫理的妥当性について、より慎重な検討が必要であり、調査目的・項目･内容について

も、科学的な厳密性に欠ける、との指摘を受けた。私たちは、社会調査の基本原則について学習し、それをふまえて実施したと思っていたのだが、それにしても、調査に先立ち、事前に他の教員の意見を聴取するなどの措置を講じるべきであった。その点で、たしかに過誤があったといえる。

そこで、私たちは、上述の指摘を真摯に受け止め、改めて「日本社会学会倫理綱領」(2005年）を学習し直し、調査する者の社会的責任の自覚と倫理的な配慮、回答者の人権の尊重、プライバシーの保護、被りうる不利益に対する配慮の重要性について、認識を深めていった。私たちのアンケート調査は、「基礎ゼミ」の活動の一環ではあるが、一般の社会調査と同様、科学的な正確性や倫理的妥当性、人権の尊重やプライバシーの保護などの基本原則をぬまえなければならないと考えたからである。また、上述の指摘を考慮し、「虐待」に関わる質問項目については、自由筆記の部分を除き、集計を差し控えた。

（４）

高津ゼミの活動の第３のエポックは、宝仙祭の「基礎ゼミ」プレゼンテーション（10 月27～28 日）である。展示にむけた準備作業が、互いの個性を知り合い、ゼミの団結を強めるうえで大きな役割を果たした（巻末：資料編の写真、参照)。学生たちは、模造紙７枚に各グループの研究成果を整理し、紹介した。そして、これを機会にアンケートに協力してくれた学友たちに感謝の意を表わそうと思いたち、このプレゼンにアンケートの中間報告としての意味も持たせることにした。

宝仙祭での展示を終えたあと、3 週をかけてグループ別でパワーポイントによるプレゼンテーションを行い、報告の水準を高めていった。これをもとに最終報告の作成にとりかかり、刊行に漕ぎ着けたのである。「高津ゼミは個性的な人が揃っていて、一見ハラバラであるが、やるときはきちんとやる。」これが、ゼミ参加学生全員の共通認識である。クリスマスを前後して、すべての原稿が出そろった。さらに佐々木大暉君が快く電子データ―のレイアウトを引き受けてくれ、表紙デザインは河野春菜さん、「はじめに」は熊谷隼君（ゼミ幹事）が担当した。

タイトルについては、補足的な説明が必要だろう。秋口には「今に学び、明日を拓く――無縁社会から希望社会へ――」ということでほぼ固まっていた。宝仙祭後、にわかに「無縁社会から希望社会へ―いじめ・子ども虐待・希望を考える―」という腹案が浮上し、その後、表紙を担当した河野さんが、後者をベースにしてデザイン化を試み、「無縁社会」という迫力のあるタイトルが出来上がったのである。このタイトルは、2010 年 1 月にＮＨＫが放送した特集番組「無縁社会」からの借用である。この語には、地縁・血縁・社縁を急速に失いつつある日本社会への警鐘と打開策の模索という意味が込められていた。私たちは、「無縁(社会)」に「希望（社会」を対置し、現実を私たちなりによりリアルに認識し、未来への手掛かりを得ようとしたのである。

（５）

本報告を閉じるにあたり、調査方法に関する釈明と、内容に関する若干の補足を行って

おきたい。私たちはまず、アンケートの集計結果を分析するにあたり、他の調査結果との比較が必要だと考え、以下の全国的な調査を利用した。(1)メディア・リサーチバンク「いじめに関する調査」(2012)、(2)Benesse 教育研究開発センター「第 2 回　子ども生活実態基本調査（速報版)」(2010)、(3)「震災から 1 年　本社世論調査」『朝日新聞』(2012)。それらの調査と、私たちの調査とでは、インフォーマントの世代や属性が必ずしも一致しない。私たちの調査の場合、インフォーマントの属性が 19 歳前後であるのに対し、(1)は 12～14 歳（2006 年実施)、(2)は小４生～高 2 生（2009 年実施)、(3)は各世代を網羅する有権者男女（2012 年実施）である。厳密な意味で、インフォーマントを同定しているとは言い難い。けれども、調査が実施された時期を勘案すると、世代的なズレはそれほどなく、本学１年次生の特性や傾向性を知るうえで、有効性を持ち得ていると考えている。

第２に、内容については、先行研究の整理や個別テーマの掘り下げに不十分さを残すことになった。アンケートについても、利用しなかった質問項目もあり、自由筆記の分析も不十分で、さらに、単純集計だけでクロス集計を行っていないなど、集計結果を十分に活用していない嫌いがある。とくに心残りなのは、１年次生の自己認識や自己イメージを生育環境や保育労働の社会的役割、社会構造などとの関連で解明しきれなかったことである。

古市（2011）によれば、今日の若者は、格差社会だ、非正規雇用の増加だと言われているにもかかわらず、今を「幸せ」と感じている。「より幸せ」な未来を想定して切磋琢磨するより、仲間たちとのんびりと自分の生活を楽しむことに「幸せ」を感じる若者が多いのだ。このことは、本学の学生にも該当する。ただし、本学学生の場合、全国調査と比較して、家族より友人や知人に「絆」を求めようとする志向性が強い。また、全国的には学校や職場より家族を重視するのに対し、本学の学生は家族と同等かそれ以上に学校・職場に心の支えを求めようとしている。一方で、友だち関係に気を使い、そこにある種の「生きづらさ」を感じてもいる。さらに、大学生協の全国的調査では、90 年代末以降、「友人よりも勉強」を重視する傾向に向かうが、本学の場合、入学当初から専門性に強い志向をもつにもかかわらず、「勉強よりも友人」を重視する傾向にある。

では、こうした傾向は何に起因し、学生たちの現在と未来にどう影響するのだろうか。少子化の進む今日の日本社会は、二極化と個人化の併存する「リスク社会」「格差社会」「無縁社会」の様相を呈している。アンケートに書き込まれた学生たちの「希望」は、そのような社会状況に回収されてしまうのだろうか。それとも、「希望社会」への転轍機となるのだろうか。この問いを解く手掛かりを、私たちは、友人とのつながり・関係のなかに求めたい。友好関係をたんなる体験に終わらせることなく、社会的なものとして認識し、再構築するとき、未来につながる道が拓けていくように思われるのである。

最後に、アンケートに協力をしてくれた 1 年次生の諸君、そして、集計作業のサポートに御尽力いただいた石原正仁氏に心から感謝したい。また、年末にもかかわらず、分担箇所の執筆に心血を注いでくれたゼミの学生諸君の労をねぎらいたいと思う。この報告は、ここに挙げたすべての人の協力によってまとめ上げることができたのである。（高津　勝）

執筆者一覧(アイウエオ順)

草野清風	第Ⅱ章第２節第１項
熊谷　隼	第Ⅱ章第４節第２項、はじめに
黒川奈津希	第Ⅱ章第２節第２項
黒木絢子	第Ⅱ章第４節第１項
黒沢華那	第Ⅱ章第２節
郡司　絢	第Ⅱ章第２節
肥沼　剛	第Ⅰ章第１節
高津　勝	あとがき
河野春菜	第Ⅲ章第１節、表紙デザイン
小甲郁恵	第Ⅰ章第３節第１項
小上馬　舞	第Ⅱ章第１節
小谷　拓	第Ⅰ章第３節第２項
小松大介	第Ⅲ章第２節第２項
斉藤　蘭	第Ⅲ章第２節第１項
佐伯みこと	第Ⅲ章第１節
坂田帆奈美	第Ⅲ章第３節
櫻木けいと	第Ⅰ章第２節
佐々木大暉	第Ⅰ章第３節第３項、レイアウト

無縁社会―いじめ・子ども虐待・希望を考える―

2013 年 1 月 15 日

編集･発行　　こども教育宝仙大学・基礎ゼミ３

（責任者：高津　勝）

〒164-8631　東京都中野区中央 2-33-26

℡　03-3365-0269

URL:hiip:/www.hosen.ac.jp/kodomo/